

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

敗走者の生と真理：大岡昇平をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹生谷, 貴志 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/567

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



敗走者の生と真理

——大岡昇平をめぐって——

丹生谷 貴志

井村 彰へ

“There is a Hand to turn the time,
Though thy Glass today be run,
Till the Light that hath brought the Towers low
Find the last poor Pret'rite one.....
Till the Riders sleep by ev'ry road,
All through our cripp'l'd Zone,
With a face on ev'ry mountainside,
And a Soul in ev'ry stone.....
Now everybody.....

—Thomas Pynchon, *Gravity's Rainbow*

*

敗北者へのコンパッション、望みなく敗走する敗走者へのコンパッション、これが大岡昇平氏の仕事の中心にあることは周知のとおりです。それは太平洋戦争でのフィリピン、そこでの敗兵としての敗走経験から来るものであると、さしあたりは言えるでしょう。それは氏自身も繰り返すことで、間違いないことだと思われませんが、それに全てを帰すのは単純すぎるでしょう。氏は戦場での敗走へとつながる徴兵の年（昭和19年）すでに35歳の壮年で、あらかた精神形成を終えた年齢、フランス人のいわゆる「成熟^{ラージュ・ド・オム}の年齢」にあったので（もともと、フランス人の「成熟の年齢」という語の語意にはキリストの死の年齢に結びつけたかダンテの『神曲』冒頭のそれか、深い危機の年齢という意もあるのですが）、如何

に戦場の経験が強烈であったとしてもそれだけで後年の氏の全てが決定されたとは考えにくいでしょう。戦場経験はおそらくすでに形成されていた氏の精神の偏執に、言わば重い鈍痛のような肉感を与えた、そういうことだと思いません。

大岡氏の世代（1909年生れ）は言うまでもなく、社会・国家制度というものに根本的な不信感を持った世代でした（因に大岡氏の京都大学時代の親友の一人は坂口安吾でした）。社会制度は彼らにとって何であれ欺瞞を体質にする、或いは欺瞞を不可避の属性とするとすら理解されていた訳で、それにマルクス主義の影響も加わるでしょう。氏は精神分析学の理論を生理的に嫌いましたが、マルクスの社会批判理論に関しては終生敬意を払っていました。もっとも、全身的な（？）スタンダリアンであった大岡氏にとって、「或る階級段階の社会」だけが欺瞞的と捉えられていたのではなく、社会というもの全てが欺瞞的と捉えられていたので、氏の生来の懐疑的性格もあずかって、氏はありとあらゆる種類の社会を欺瞞的と捉える人だったようです。結果、当時のマルクス主義的運動家が奉ずる来るべき「善き社会」という構図も氏にとっては有り得ない幻想だったので、氏は共感にしても運動家としてそれに参加することはありませんでした。ではアナーキストに近い性向を持っていたかといえば、氏の懐疑主義が、「社会なき社会」などという矛盾論法を持った主張を受け入れるはずもないでしょう。結局青年時代の氏は、欺瞞を属性とする社会をスタンダール＝マキャベリ譲りの（？）エゴイズムの処方で斜めに生きるという……要は一種のシニシズムを人生処方としたように見えます。ニヒリストとならなかったのは、これまたスタンダール譲りに、氏は捨て身の情熱＝エネルギーというものだけは信じていた……ということでしょうか。

ともかくここから、氏の「社会から外れてしまった者」「社会に内属できず
コンパッション
に生きる者」への共感が形成されます。そうした者はなにか具体的な主張なりを持ちはしないだろうにしても、少なくとも社会＝欺瞞に対して生き難い生を生きる実存者として、一種の純粹さを持つはずの者として氏を魅了したはず

で、そこからたとえば氏の「女性的なるもの」への不思議なくらいの（むろんここにもスタンダールのシニカルな、女性的なるものへのロマン主義があったかもしれませんが。周知のように氏はスタンダールの『恋愛論』の翻訳者でもあります）特異な憧憬が形成されたのかも知れません。さらにまた、「詩人」という存在に対する敬意もそこから来ると言っていていいでしょうか。それは「詩」という芸術作品に対する敬意ではなくて（氏は根っからの散文的精神で、「詩」という表現形式そのものに関してはさして強い興味は持たなかったように見えます）、畏友中原中也や富永太郎のように、根本的に社会内に生きることの出来ない一種本能的な純粹存在としての「詩人的なるもの」への敬意と言うべきでしょう。さらに、女性的なるものに関しても、或いは「詩人的なるもの」に関しても、氏の偏執が破滅的なものへの偏執を内包していたように見えることは重要かも知れません。中原中也や富永太郎は（或いはここに戦後一時氏を魅了した渡辺崋山も含めていいかも知れません。崋山への興味は消えたのではなくて、その後すぐにとりかかった『レイテ戦記』の準備によって立ち消えになったという事情があります）その「詩人的なる生」において自滅的に夭折して行く者として氏を魅了したようであり、女性的なるものに関しては例えばひたすら社会との間に薄い隔離を生き、その外へと漂いながら自殺して行く『花影』の葉子はその典型でしょう（氏のロマネスクな作品において、『花影』はむろん、例えば『武蔵野夫人』や『歌と死と空』のような作品で、主人公の女性の多くは自殺します）。これはしかし、破滅して行くものの美しさという通俗ロマン主義の美的な性向の残響と理解するのは性急だと思います（『天誅組』執筆のさいその執筆要因の大きなものとして、「十津川溪谷の紅葉の中、崩壊してゆく彼らの姿に詩情を感じていたようです」と書いた時、或いはさらに『レイテ戦記』で神風特攻の飛行士たちを「われわれの誇りでなければならぬ」と書いた時、氏はそうした誤解を引き起こした気配があります）。おそらくそれは滅びへの倫理的かつ美的感応ではなくて（或いは「美的」という茫漠とした概念の解釈によってはそれも含まれるでしょうが）、言わば大岡氏の思考の論理的な帰結として導かれたものと、さしあたりここでは無根拠のままに、考えておきたいと思います。例え

ばアリストテレス的に人間を「社会的動物」と定義すると、そのような存在が社会からはぐれ、或いは抵抗し、逃れ、或いはまた排除されようとするなら、必然的にその者は人間以外のものになるか以上のものになるか、或いは死なねばならない、といったようなチェックメイト空間の選択しか得られないといった具合に（これは後に見るように、それこそ戦場の敗走経験を通して意外に複雑な構成を持った多義的な「論理的帰結」の様相をとると想像されます）。

ここで第一の図式を命題化(!)しておきましょう。大岡氏にとって、「社会は本質的に欺瞞的であり、純粹さは社会の『外』にしかない」。

ここで「外」とカッコ付きで書いたのは、社会にはおそらくドアの外とか壁の外といったような意味で開けるような具象的な外は存在しないからです。或いは反社会とか非社会といった否定形で示されるものは二項対立公式である以上、対項関係として社会に内属するものであり、社会の外とは異質です（例えば「裏社会」はそれもまた社会でしかない）。社会の外は社会に属しながら社会から決定的にずれているというかたちでしか現象しません。アリストテレスならそれを美しく「イディオット＝ほとんど神か或いは獣であるような者」と言うかも知れませんし、トリスタン・ツァラなら「近似的人間＝人間そっくり」と言うかも知れませんが、例えばその極端な例は「人間の死体」です。死体はもはや誰でもない肉ですが、なおそれは「誰か」を指し示す限りにおいて社会的人格に似たものを纏っています。それは社会の内でありながら、すでに……「外」なのです（大岡氏の『野火』の重要主題の一つである人肉食の問題がここに結びついてくるでしょう）。

*

さて、このような精神を持つものが戦地に送り出されます。昭和19年のフィリピン……それはもはや通常の(!)戦地ではありません。戦局はすでに二年前から悪化し、前年にはもはや絶望的と言ってよい状況になっています。19年初め、インパール作戦の敗退とサイパン島全滅によって絶望化した戦況の中で

東条内閣は総辞職し、グアム・テニアン両島全滅、日本の全軍敗退と本土壊滅がほぼ間近の日程表に記されます。つまりは、大岡氏はあらかじめ敗北が決定した末期状態の戦争の戦地に送り出されるのです。戦争の最低限の正当性が「国家社会＝国体」の自己保存と自己防衛にあるとすれば、もはやその戦争はその最低限の正当性も持たない戦闘（文字通りの意味での「死闘」）となった戦場です。ちなみに大岡氏のフィリピン上陸は7月15日、欧州では6月6日ノルマンディー上陸作戦成功、米軍のサイパン上陸は7月7日、グアム・テニアン全滅は9月29日、11月24日には最初の東京空襲、大本営云々に関係なく、当時細部はともあれ大岡氏はほぼ正確にその情報を手にしています。大岡氏は敗北の決まった戦争の絶望的な兵士として文字通り何の正当性もない「犬死に」を死ぬための戦いに送り出されることになる訳です。

大岡氏個人が辿った現実とはほぼその『俘虜記』に記されています。氏を含めて、壊滅して行く日本軍が置かれた戦線の全貌は後の『レイテ戦記』に書かれることになるでしょう。ここでは詳細は追いません。このような戦地で大岡氏のような精神がどのように動くか、想像してみたいのです。

まず第一は簡単です。かねてから欺瞞的なものと見做されていた社会が文字通りその欺瞞と愚劣を極めた機動に自分を巻き込んだことへの再確認。あらかじめ敗北の確定したと言っていい絶望的で無意味な戦いに駆り出され、無意味に死んで行くだろうことの確認。おそらく国家組織は水際の自己保存を試みるだろうが、それは少なくとも今や比島を中心に最後の陣営をひいている陸海軍の実質上の壊滅と「内地」の相当部分の崩壊の後のことであり、それまでの間日本人は無駄に戦わされ、むろん殺しもするだろうが、大部分が愚劣な玉砕作戦によって無駄死にしてゆくだろうことの確認。要は愚劣と欺瞞を属性とした社会への不信の完全な再認。そして……

そしてここに、後にいささか錯綜した思考を必要とする事項が加わります。この愚劣な欺瞞の戦争、あらかじめ敗北の決した戦争という無意味で無残な戦争によって日本人は壊滅しようとし、そして、しかし、そのことは同時に、そ

の愚劣な欺瞞的社会そのものが壊滅することを意味する、ということです。これは或いは、所謂非公然活動・反国家的地下活動を行っていた者たちの幾人が持ったかもしれない希望の見通しに似ています。下世話に言えば、馬鹿共が勝手に自滅してくれれば、後にはより良い社会を構成する者たちだけが残るだろう……これは皮肉なたちでの革命闘争の代理となるだろう、と。じっさい大岡氏は俘虜生活中に徒然に立てた帰還後の仕事の計画の中に、後に『酸素』という未完の長篇小説となる計画をたて、そこで似たような見通しの中で末期的な戦争の中を蠢く者たちを描こうとしています（長編『酸素』は冒頭数百ページで完成されることなく放棄されます）。しかしこの見通し（!）は、大岡氏のような精神には受け入れ難いものが含まれます。まずは単純に、仮に帝国日本が壊滅したとして、近代世界の国際関係において国土は即刻どこであるか、連合国内か他国であるか、どれにしる勝利した既存の社会組織の管理下に置かれ、その元に復興した社会が組成されるにしても、それは仮に今までよりもましであるにしても欺瞞的であることに変わりはない社会組織に入れ替わるだけのことであるだろうということ（じっさい、連合国内でなければソ連であったとしても、そこに存立するのは欺瞞的社会組織であった訳です）。少なくともそれを良き未来の希望として絶望的な敗退と死を覚悟することは自己慰撫にすらならない推定でしょう。では何が残るか？ 大岡氏の答えは絶望的と言えれば絶望的なものとなります。つまりは、一つの小さからぬ社会組織全体が壊滅して行く、その壊滅を生きること。それが戦いである以上戦争は敗北を蓋然性として含みはするでしょうが、戦争は基本的に社会の自己保存と自己防衛、さらにはその社会の勝利による自己拡張をその欲望として遂行されるとすれば、それら一切を諦めた戦争、確定された敗北と敗走と壊滅の自覚においてなお遂行され続けようとする、愚劣というよりもむしろもはや倒錯したとも言うべき戦争がここにある。自己保存を諦めた社会意志、自己防衛の瓦解の自覚においてなおも社会意志であろうとする異様な倒錯……。じっさい、これは暗鬱な皮肉を含めても、希有な経験ではないでしょうか？ 独我論の卑屈な幻想ではなくて、現実に関

の死がほとんど巨大な一社会の壊滅と一致するとしたら？ 仮にあらゆる社会は欺瞞的であるとすれば、少なくともその壊滅において開くかもしれない「外」, 「社会=欺瞞の外」を見極めること。その「外」へと死んで行くこと。要するにまずは孤独なアポカリプスの期待, 孤独で陰鬱な期待として大岡氏はそれを生きる(死ぬ)決意をすることになります。

「私の三十五年の生涯は必ずしも常に幸福ではなかったが、不幸も耐え忍び得る程度のものにすぎなかった。これから比島の敗軍の中に死に果てねばならぬのは、たしかに遂に決定的な不幸であるが、その避け難い死の前にこういう幸福の瞬間があるならば、それでよかったかも知れない。前途に死がなかったなら、今私にこの幸福感があるかどうか疑問である」(『比島に着いた補充兵』)。

残酷な皮肉によって、一社会の全面的壊滅の戦場、その敗北と敗走と死は、社会の、つまりはありとあらゆる欺瞞の壊滅の瞬間を開く浮薄だが截然とした僥倖のようなものへと、誤解を怖れずに言えば、「詩的空間」へと、大岡氏の孤独な批評的精神において、回転されようとする訳です。

……むろんこれには大岡氏を後に苦しめる問題が含まれます。端的に、氏が経験したものは、氏の孤独に留まる経験ではなくて全軍に及ぶ、氏の親しい「戦友」たちも含んだ夥しい死者、或いは国家全体に及ぶ壊滅の経験と当然のことながら無関係ではなく、そこから氏は氏の孤独だけを救う訳には行かないという倫理的問題に出会わざるを得ないからです(じっさい氏は敗軍の敗走者の孤独と屈折した救済を描いた傑作『野火』が他の戦友の死を背景において氏の孤独の記録となっていることに罪業意識を口にするようになります)。定められた敗北を戦う敗軍とは何か？ 定められた自身の壊滅に自ら開いて行く倒錯した社会とは何か？ 自己保存と自己防衛が社会の本性であるとして、結果としてその放棄、或いはその機能不全に向けて起動する狂った社会とは何か？ その壊滅の瞬間に、一瞬とは言えあの戦場で戦い死んだ死者たちが、さらには社会全体が「詩的空間」へと開かれる、そうした視点は有り得るのか等々……といった問いが答えねばならないものとして残されることになる訳です。

*

ともあれまずは実質上の全軍壊滅の切迫における敗兵、敗走者の孤独において開かれる空間について見てみましょう。言うまでもなく『野火』です。これは単に太平洋戦争の或る過酷な生を生きた者の実録である以上に、明らかに特異な残酷さにおいて開かれる一種の詩的空間アポカリプスの開けとして理解されるべきものだと私は思います。そして後に大岡氏は幾つかの試行を経てこれを孤独な個人のそれを超えた一種の、壊滅する集団的空間の窮迫へと開く試みへと向かう、そう私には思います。

『野火』は大岡氏の経験を小説化した「私小説」ではなく、自身の経験にフィクションを織り交ぜて書き上げられた「ロマネスク」です。だいいち、これは帰還後に「狂気」と診断された主人公が病室で書きつづったという設定が後半で明かされる仕組みになっていて、現実の氏は狂気房に隔離された経験は持ちません。

主人公は大岡氏の経験と同じように、重度のマラリアのために戦闘能力のない余計者——つまりは半ば死者——として比島の山中に散開した陣地をたらい回しにされ、その間に部隊は散逸しつつ敗走に入り、主人公は孤絶の中にはぐれます（大岡氏の実体験の単独敗走は正味一日でしたが、『野火』では数日にわたる単独行になります。と言っても、状況が過酷化して拡張されているとは言えず、と言うのも大岡氏の経験した孤立は重病と飢え、脱水状態で死に場所を求めてのそれで、じっさい氏は手榴弾による「自決」を実行しますが、当時配給された六割近くが不発弾だったという手榴弾の不良のために失敗していますから、むしろ濃密な窮迫を長い孤独へと張り延ばしたというべきでしょう）。

主人公はフィリピンの山中に孤立し彷徨う。つまりは社会の外に弾き出され、しかもその社会は今やそれ自体潰走の中にあり、社会としての機能不全に陥り解体し壊滅しようとしているのですし（大岡氏の現実の体験でも、はぐれた集団の幾つかが全滅したようです）、自身は余命を計れない重病状態、その孤立と社会喪失は徹底的とさしあたり言っていていいでしょう。結果、絶望的とは言え主人

公は一種の自由の中に出ます。もはや自分の行動を管理し命令する外的な社会はどこにもいないのです。

臓腑を抜かれたような絶望と共に、一種陰性の幸福感が身内に溢れるのを私は感じた。行き先がないといふはかない自由ではあるが、私はとにかく生涯の幾日かを、軍人の思うままではなく私自身の思うままに使うことが出来るのである。（『野火』）

遂に彼は、廃棄と喪失というかたちであれ社会の外に、その欺瞞と無根拠な管理体系の外に出たのです。あまつさえその社会は崩壊してしまったのです。何という自由！ しかし事はむろんさほど軽快には行きません。病と飢えと脱水はほどなく彼の死をもたらすでしょうから、社会の代わりに今や彼は死の窮迫の支配下に入った訳です。さらに敗軍の敗走兵の身上は複雑です。事実上友軍は壊滅していても、敵にとっては彼はなお兵士であり、そうである限り追い回し追い詰め、殲滅されるべき者であることに変わりはない。彼は社会のないノーマンズランドに出たのではなく、彼に絡みつき追い回し、おそらくは殺しに来る社会、押し黙りながら到るところに潜在的に潜む社会の脅迫の中に投げ出されるのです。しかも彼をその窮迫の中に置くのは「敵の社会」だけではない。敵が彼を追い回すのは、彼が、実際上は完全に失い壊滅しているはずの彼の「同胞」の社会に属する者——日本兵＝日本人——と見做すからであり、だとすれば奇妙な皮肉によって、彼は、彼を見捨て、彼が失った、もはやありもしないはずの「同胞の社会」からも追い回されていることになるからです。言わば敵と同胞という二つの社会、或いはいっそ二つで一つの「社会一般」が彼を追い回し追い詰め殺そうとしているのであり、彼はだから今や社会一般から逃げ続けなければならないという異様な錯綜の中に置かれることになるのです。彼は社会の外に投げ出された……しかし、その一瞬の自由は蒸発し、異様なことに彼は今や社会一般に追い回されそこからこそ逃げ続けねばならない者としてフィリピンの山中に置かれ彷徨うことになる。何処へ？ 社会の（ほぼ）存在しない場所、社会の外へ、あまつさえ病＝死という別の敵がそれに加わ

り、外のさらにその向こうの「外」へと、他に彼に選ぶ場所はさしあたりない。社会の存在しない、さらには彼を殺す病も飢えもない場所へ……つまりはほとんど死の空間へ（死んだ者を追い詰めることも奴隷にすることも殺すことも出来ない、と、ヘーゲルか誰かが言っていたはずです）。ほとんど死の空間へ……敗走者は何はともあれ自己保存のために敗走するのですから、生きねばならない。しかし、生の空間はことごとく彼を押し黙った不可視の中で監視し追い回しおそらくは殺す者たちに満たされているとすれば、つまりは生の全域が今や一種の見えない監獄と化しているとすれば、逃げ場は生の空間ではない。生でもなければ死でもない「有り得ない」空間へと、つまりは「外」へと彼は逃げるしかない。病理とは別の意味で「狂気の空間」と言うしかない空間へ、敗走し続けるしかないでしょう。と言うのも、孤独であっても彼の思考を主体として統御しているのも自意識という一種のミニマムな社会ですから、彼の「外」への敗走はそのミニマムな社会の枠からも逸脱した場所へと彼を導くことになるだろうからです。じっさい彼の思考と外界の関係はバランスを崩して行きます。ほとんどゼロに近くなった外界統御能力の中で外界は対象としての整序からはみ出し始め、カント的な物自体と言うよりもむしろ文字通り「もののけ」のように自存する何かとなり、遠近法は狂って膨張し始めます。それを主人公は外界の異様な人間のいない生の氾濫として看取り、一種の恍惚状態に入り込みます。

私は死の前にこうして生の氾濫を見せてくれた偶然に感謝した。これまでの私の半生に少しも満足してはいなかったが、実は私は運命に恵まれていたのではなかったか、という考えが閃いた。その時私を訪れた「運命」という言葉は、もし私が拒まないならば、容易に「神」とおき替え得るものであった。（『野火』）

この文はすでに引用したフィリピン到着時の大岡氏を襲った奇妙な幸福感の転記とも読めますが、ここでは外界の膨張は箍を外れた位格にまで達して、その錯乱はついに「神」という言葉まで導き出し、さらに最後には次のような叫

びを書きつけるに到る錯乱にまで達します（前も書きましたが『野火』は生還した主人公が精神病院で書いた手記という体裁を取っています）。

そしてもし、この時、私が吐き怒ることが出来るとすれば、私はもう人間ではない。天使である。（『野火』）

これは敗兵の一人の肉食＝人間狩りを目撃した瞬間の主人公の怒りの発作の叫びですが、人間が人間を、自己保存において支配＝管理し、殺し、収奪し、奴隷化し（つまりは生きてまま殺し）、「喰らう」……要は人間的社會への嘔吐と怒りであり、主人公はすでにその「外」に属する誰でもない誰か（天使？）となろうとしている訳です。……ともあれ、「神」やら「天使」やらといった過剰な語に今は重きは置かないことにしましょう。重要なのは、主人公が孤独な敗走の中でついに人間的社會の「外」の開けへと開こうとしているということです。例えばこれを曠野の修道修行僧やら面壁九年の高僧やらが見出す或る純粹状態に似たものと言って言えなくもないでしょうか。或いは留保なき現象学的還元やらにおいて思索者が見出すかも知れない或る「真理」の見出しに似ていると言えなくもないでしょうか。しかし、敗兵は現世を厭離し人の世を棄て浄化を望む意志においてそこにいるわけではありませんし、真理を求めて、それへの意志においてそこにいるわけでもありません。彼は追い回され追い詰められたはいずりの窮迫においてそこにいるのです。文字通り糞尿と飢えと渴きと苦痛と疲労と壞疽の腐臭、死の逼迫と汚辱と果てしない無名化においてそこにいるのです。そしてしかし、それは、何はともあれ社会的なるものからの、その欺瞞からの或る浄化の空間であることは確かでしょう。……ここにおいて敗軍の敗兵にして敗走者という絶望的な状況が、ひいては太平洋戦争、或いはレイテ戦、比島攻防戦全体が、そして敗軍の壊滅全体が、異様な皮肉によって、主人公を社會の「外」へ、一種の浄化の空間へ、あたかもダンテの『神曲』の地獄巡りの導入のように、その道行きの条件へと変異するのです。

……この意味で『野火』を、戦争告発の「戦争文学」としてではなく、一種

の、「詩的空間へのメールシュトレーム」的浄化の書と読むことが許されるでしょう。むろん大岡氏は戦争を、氏の個人的な戦場経験を利用してそんな教養小説を書く意図などなかったはずです。むしろ、そうした浄化が、観念ではなくて仮借ない過酷な現実においてのみ生じること、それ以外には生じ得ないこと、現に自分においてそれが生じたこと、或いはそれを証すことによって絶望的な汚辱そのものの現実を詩的空間の実相そのものとするのがその本意だったと思われる。『野火』を書いた時、少なくとも大岡氏は現実を利用して文学を書く、書けると信じるほど傲慢でもなく青二才でもなかったのも、重要なのは現実の方だったはず。

……とは言え、『野火』が大岡氏個人の自己救済の試みに読めてしまうのは事実です。ダンテの『神曲』があればほど膨大な苦悶の人々を描き出しながら、ただ一人「私」だけが天界の薔薇への扉へと誘われるように見えてしまうのと同じです。『花影』のエピグラムに『神曲』からの一節、“ricorditi me, che son Pia: Siena mi fé, disfecemi Maremma.”と書いた時（これは今ある日本語の翻訳の調子では駄目で、どうしてもトスカナ・イタリア語原文でなければならないような一行ですが）、むろんその時であるはずもないでしょうが、ともかくその時、あの「地獄」にあまりに多くの者が、このような一行に収められて死んだまま置き去りにされたままであることが意識された、そう思われます。可能なら、全てのものを「地獄において浄化」しなければならない、それが大岡氏の続く仕事の懸案であり倫理となるはず。

*

『野火』の後もう戦争物は書かないと大岡氏は口にします。それは、「また戦争物ですか」と言われることが業腹で、と如何にも氏らしく韜晦していますが、おそらく戦争経験ではなくて、あの戦争で死んで行った者に如何なる位置を与え書くことが出来るかの迷いの時期でもあったと思われる。すでに対談などでは『レイテ戦記』を書く意志を口にしていますが、未だ必要な資料が公

刊されていない時期だったこともあって、先延ばしにされます。それ以前に、氏には、あの戦闘を戦い死んで行った者たちを軍上層部の愚劣と無能の犠牲者やら愚昧な国家の犠牲者やらという構図だけで描くことへの強い抵抗があったでしょう。馬鹿共に騙された哀れな犠牲者たちという構図は要するに馬鹿に騙されて馬鹿な戦いを戦った馬鹿な者たちと言うに等しいでしょう。さなきだに、すべてを愚かな指導者たちに帰して、死んだ兵士たちも含めるかのように、自分たちをその愚昧の犠牲者と規定することは、戦後の日本人の耳鼻には快く響き過ぎ、それがすでに戦後社会のいい気な偽善を醸成していたのでした。かといって、あの戦争にはそれなりの理由があったなどと言い募る偽善も許せない。どんな愚行でも、社会には、自分を護る為だったくらいの言訳は存在するので、それを正当防衛にすり変えることも容易です。……それらとは違うところからあの戦闘を見ることは可能か、その視点が掴めない時期が続いたのだと思われます。あの戦争自体は国家と資本家たちの自己防衛と利益収奪以外の説明は有り得ないし、国民の少なからぬ者がそれを支持したとして、国家社会が、「市井の庶民」の自己防衛的な自己保存本能に程よく阿って稼動するのは当たり前の話なので、それを正当化するのは無意味でしょう。要するに戦争自体は、欺瞞を本質とする社会の起こした愚行であってそれ以上でも以下でもない。そうしたものとしての戦争と、あそこで戦われた戦闘とをどう分離しつつ書き得るか……これが第一の懸案になると思われます。

大岡氏の作品の系譜に、『武蔵野夫人』や『花影』に代表されるロマネスクの他に、氏の所謂「調べ魔」による「伝記」と「歴史小説」があることは周知の通りです。と言うか、氏自身にとってはそれこそが氏の仕事の中心だったと言うべきでしょうか。その「歴史小説」の系譜にも——こうした分類には危険があることは承知の上で——二つの系譜と言うべきものがあり、一つは生来の懐疑主義と推理好きから来るらしい系譜で、要するに伝説や風聞に覆われた事件を膨大な資料と推理で見直し「本当のこと」を摘出しようとするもので、例えば未完のまま最後の仕事となった『堺港攘夷始末』は森鷗外の『堺事件』を

嚙矢に、伝説と感傷に覆われた「幕末・堺港の戦闘」と「首謀者割腹の庭の出来事」を、資料を調べ抜いて事実により近いものとして書き出す試みでした。もう一つは「敗北と敗走に終わった戦闘」を描くものです。この後者が幾つかの試行の後に畢生の『レイテ戦記』へと結実することになります。

「敗戦と敗走に終わった戦闘」というだけなら、特に日本の歴史小説の多くがそれに属すると言ってもいいでしょう。戦闘とは要するに勝ったり負けたりするものなので、歴史小説の大部分が戦いを題材にする以上、勝利も書かれれば敗北も書かれるのは当たり前のことです。自分が当事者でない限りこれほど人を熱中させるものも少ないので（「誰も死ななければ戦争は最高のスポーツでありゲームだ」と言ったのは自殺したモンテルランでした）、司馬遼太郎氏からゲームやアニメまで、それに覆われている訳です。或いは負けた者への判官びいきも人気の題材です。大岡氏はこれまた韜晦気味に自分の「判官びいき」を口にしますが、それはむろん氏にとって切迫した問題を含んだ主題だったに違いありません。敗北と敗走を経験した者であること……それ以上の倫理的問題が、です。

氏が最初に書いた「敗北と敗走の歴史小説」は戊辰・会津攻防戦における敗将大鳥圭介の手記に基づいた短篇『保成峠』（1953年。「保成」は「ほなり」或いは「ぼなり」と読みます）でした。3年後には全く同じ素材で『檜原』という、これもまた短篇を書いています。その詳細はともかく、その前に、大岡氏の「敗北と敗走の戦記」の重要な、著しい特徴を銘記しておきましょう。それは、氏が題材に選ぶ「敗戦」が、局地戦でのそれや一時的敗戦ではなくて、実質上或る社会組織が完全に壊滅する類いの敗戦であるということです。大鳥圭介の敗戦・敗走は会津藩の最終的な完全壊滅でしたし、平将門の敗北と戦死は彼の東国天皇まで名乗った異様な体制の完全壊滅でした。氏の歴史小説では『レイテ戦記』をのぞいてもっとも力を注いだ大きな仕事となった『天誅組』も、その驚くほど純粋な（ファナティックでもある）夢とともに壊滅によって跡形もなく消え去ります。レイテの戦いについては言うまでもありません。そこには例え

ば司馬遼太郎氏の作品やら三国志ものやらに著しい名将の知力を競うような緊迫した駆け引きやら剛の者の活躍は流されるエピソード以上には問題とならず、ただひたすら敗軍は全軍その負けの明白な敗北を戦い、崩壊し、完全に壊滅して行きます。必ずしもそれに参加した全員が死滅する全滅である必要はなく、ただ重要なのは、それを支えていた社会組織が完全に、留保なく崩壊・壊滅するということです。さらに厳密に言えば、その敗北は、単純な壊滅ではなくて、敗走の中で綻びて行く社会組織体の綻びそのものを生き、その壊滅の中で、まるで自分の身体から逃れようとするかのように、社会の外へ外へと、死へ、或いはほとんど死へ、遂には「外」へと向けて、戦いつつ逃げに逃げ、雪崩れ込んで行く、そうした敗北であり敗走であるということです。この最後の特徴は意外に見逃されがちの特徴だと私には思われます。と言うのも、どうしたわけか大岡氏は例えば『天誅組』のような重要な作品で、肝心要の(?)その外への敗走を描かずに未完のままに放擲してしまうからです。『天誅組』では、その企画のきっかけが十津川溪谷での長い敗走と壊滅を描くことと幾度も語られながら、刊本は敗走以前の、天誅組の名乗りを挙げるまでの長い前史と拳兵の部分で書き止められ、わざわざ後書きに、後のことはこれから書かれますとことわって単行本にしたまま、ついに書かれずに終わってしまうのです(じっさいは一応、首謀者の一人吉村寅太郎を題材にした短篇で、十津川溪谷での彼の戦死の状況が記録に基づいて描かれますが、そこには予告にあった「十津川溪谷の紅葉の中での天誅組敗走と壊滅」そのものは描かれませんが)。理由は様々に想像出来ませんが、私の思うに、社会の壊滅、その外、或いは「外」への敗走に惹かれることがいったい如何なることを意味するのか大岡氏自身完全には掴みかねていたのではないかと思われるのです。さらには、そのことと、長く深い懸案であり続けた巨大な敗戦記『レイテ戦記』が取るべき主題の配置とが——つまりは「英霊を慰める」というのとは別の視点で彼らの戦いと死を歴史の中に刻み込むという主題と——どう関係するのか掴みかねていたからではないかと、私は思うのです。じっさいここには錯綜した問いの絡まりがあって、掴み難いので

すが、何とか試みてみましょう。

『野火』に見られたように、孤独な敗走は一種ミスティックとも見えかねない「狂気＝浄化」、言葉の真の意味でのアポカリプティックなヴィジョンへと開く類いのものでしたが、それはあくまでも孤独な敗走者の一種の幻視とも言えて、それを敗軍という集団の敗走の本質へと拡張することには如何にも無理があるようです。無理があるのですが、しかし、大岡氏はそれを試みようとしていた気配があるのです。つまり、一つの社会体全体が社会の外へ外へと敗走し、言わば社会体全体がその「外」への崩壊そのものを生き始める、そうした瞬間を描き出そうとしていた気配があるのです。言い換えれば、社会体全体が一種の詩的空間へと散開し、そこで散逸と蝟集を繰り返す何か知れない動きを始めるかに見える、そうした瞬間を描こうとしていたのではないかと思うのです。これは勝手に修辭的想像ではないつもりです。じっさい、帰還後奥様の実家のある兵庫県明石市の仮宅で作家としての可能性を探りながら懊惱模索していた時期に書かれた『疎開日記』の中の『俘虜記』の原形の計画の行文に次のような一文が読まれます。

『生きている捕虜』の方法。

『捉まるまで』——ポー的想像力に統御された彷徨記とすること。渴え。

(……) ショパンがバッハを研究したように。ポーを研究すること。

ここで繰り返される「ポー的想像力」ということが何を意味するのか、おそらくは幻視がそのまま論理でも有り得た天才の方法といったような意味とも思われますが、その「ポーを研究すること」という行文の中には、間違いなくポーの『ユリイカ』が存在したはずです。ポーが描き出した『ユリイカ』の散開と蝟集を繰り返す波動宇宙のように人間集合を、その戦いを、捉えること。これが大岡氏の念頭にあったと言って間違いないと私は思います。じっさい、後年氏の隣人にして親友となる武田泰淳氏はまさにポーの『ユリイカ』を枕頭にして象徴性において全世界的とも言える戦闘の歴史記述の可能性を書き記し

た『司馬遷』を戦中（昭和18年）に書いていたのです。『疎開日記』を書いた時それが大岡氏の念頭にあったかどうか明らかではありませんが、少なくとも同じく『ユリイカ』的ヴィジョンにおいて敗走を捉えるという意図は漠然としたかたちでしるあったと思うのです。……繰り返しますが、これは如何にも無理がある意図であり、事実を幻視によって拡張することを断じて認めない大岡氏であってみればなおさらです。

ことはかなり微妙に錯綜するようです。先を急ぎすぎないようにしましょう。

大岡氏の「敗戦・敗走の戦記＝歴史小説」が単なる敗戦記ではなくて、社会の外へ外へと敗走して行く先に開かれる一種ミスティックな「詩的空間」の現実的可能性へ向けられた試みであるだろうことを一瞬、奇妙なこだわり、むしろ偏執において示す文章があります。先に触れた会津の武将大鳥圭介の手記を元に書かれた二つの文書、とりわけ『檜原』（「ひばら」と読みます）の末尾に近い部分です。

『檜原』は度々書いたように戊辰の会津藩士大鳥圭介が函館戦争投降後の獄中で塵紙に書いたと言われる手記『南柯紀行』、その会津を中心とした幕臣派陸兵軍壊滅の保成峠及檜原の敗戦敗走の部分だけを取り出して書かれた歴史小説と言うよりも史伝的随想とも言うべき短篇です（じっさい、雑誌『文藝春秋』に発表された時は『磐梯愁色』という随想風の題名でした）。同じ主題ですでにその三年前『保成峠』という短篇が書かれていますが『檜原』の方が書き振りが緻密で、ここで触れたいと思っている重要な逸脱が末尾にあって興味深い文章となっています。何故大鳥圭介なのかについては全くの偶然だったと大岡氏は書いています。「（大鳥の手記を読んだのは）復員後友人富永次郎の小金井の家に寄寓していた間に、偶然この本を見たのが機縁であった。（……）圭介は先輩河上徹太郎夫人綾子さんの祖父に当り、前から何となく身近の感じがあったのが、直ちにこれらの本を書架より下す気になったらしい」（『保成峠』）。大鳥圭介については一般には英仏蘭語をよく解し、西洋築城術、数学、フランス式兵術に通じた会津藩士、幕府臣下の英才、榎本武揚の下で土方歳三と共に函館五

稜郭戦争を指揮し戦った者、或いは出獄後数年、朝鮮公使となり日清戦争の準備工作にあたり、男爵の爵位を得た明治の顯官として知る人も多いでしょうが、大岡氏はそれらについては「まったく興味がない」と文字通り切り捨てています（函館戦争もともあれ敗戦だったのですが、氏がそれには全く興味を示さない点は重要でしょう。どうやら函館戦争は氏の間からは、戦争以前の、新政府におけるヘゲモニーを狙った幕府技術方高官の空疎な腹芸的談判の戦にしか見えなかったようで、その敗戦も単に話し合い決着の談合投降以上でも以下でもないものと映ったのでしょう。それで死んだ兵士もいたのですからいい迷惑ですが、氏のもっとも軽蔑する類いの戦闘です）。氏は大鳥の手記からただ戊辰・会津壊滅の敗将・檜原の敗走者としてのみ取り上げます。『保成峠』と並んで大岡氏のいわゆる「敗退敗走史伝」の最初の試作です。全体は大鳥の手記を中心に保成の攻防戦から敗退、檜原越えの敗走までを追ったもので、後の『天誅組』さらには『レイテ戦記』に到る仕事の文字通り筆試的試作ですが、今はその詳細は措きます。ここで問題としたいのは『檜原』末尾に書き出される少し異様な偏執の感じられる部分です。攻防から敗戦の経緯を一通り語った後、若松城陥落で山に敗走した会津を中心とする幕臣派諸藩の兵士、武士、その婦女子を含めた者たちの雨後の泥濘の敗走が語られる（因に白虎隊の悲劇はほとんどエピソード以上には書かれませんが）。「大塩より檜原へ到る道は萱峠、蘭峠越えの山路である。雨後のこととて、泥深く行歩難渋である。長岡侯の奥方、侍姫、その他女共の肩に寄り手を執り、険路泥濘の中に屢々転倒しつつ行くのは、見るも憫れであった」（『檜原』）と、これは大鳥のではなく大岡氏の文章で、やや講談調ですが、それはいいとして、それを描いた大鳥の文について次のような強調の強い註をつけて大鳥の原文を引用します。「ここに私が『南柯紀行』中、最も印象を受けた文字がある」、と書いて、引用されるのは次のような文章です。

後ろを顧れば城下の砲響炎焰耳を貫き目を覚し、肝胆時に碎け、前を望めば千山万山、食糧なく弾薬なく涕涙時に下る。

如何にも漢文読み下しの詠嘆調ですが、さほどの名文とも見えませんし、何が大岡氏の印象を最も引いたものであるのか戸惑います。しかし実は大岡氏が立ち止まったのは、おそらく地理好きの調べ魔らしく検索した明治40年刊の『大日本地名辞書』の中にこの同じ文の異文を見つけた、その異文の方なのです。煩瑣になりますが引用します。

後ろを顧れば、城下の砲響[・]炎[・]焰[・]、眼に映り耳を貫き、肝胆も砕くる計り、前を望めば、万山千峰愁色を帯び、弾薬なく食糧なく。(傍点大岡)

「炎」が「災」に「耳を貫き目を覚まし」が「眼に映り耳を貫き」等々の異文はさしたることないものとして看過されますが、大岡氏が印象を、というかほとんど衝撃を受けたらしいのは「前を望めば千山万山」という文が「前を望めば万山千峰愁色を帯び」と、「愁色を帯び」という句が付け加わっているという点なのです。

「炎」と「災」の異同は論ずるに足りないが、「愁色を帯び」の一句の有無は、少くとも私にとって重要である。(『檜原』)

何故か？

私は太平洋戦争中、比島の敗戦を経験した者であるが、敗走中自然が屢々「愁色を帯びる」のを認めた。その多少の文学的表現を試みたこともあったが、大鳥のこの句を見て、実はどきっとしたのである。(『檜原』)

ここで「多少の文学的表現を試みた」とあるのは主に『野火』のことでしょう。これに続く大岡氏の文章は氏には珍しく混乱が感じられて分かりづらいのですが、引用は煩瑣なので文意を読み取って行くと、自分は比島の敗走中、不意に自然が異様な膨張を起こして変異するのを度々経験した、それを『野火』に書いた。大鳥もまた敗走の中で同じような自然の変容を経験したのではないかと衝撃を受けたのだ……これが、氏が大鳥の文に感じた衝撃の説明。じつは

これで全てなのですが、そこに続くのは、妙な言訳で、要するにそれは自分の勝手な深読みで、単に大鳥は絶望で落ち込んだ自分の気分を言っているのであって、別に彼の前で自然そのものが変容したのではないようだ、至極常識的に訂正します。文意の何となく変な文章なのでやはり引用しましょう。

「弾薬なく食糧なく」は描き得て簡明であって、愁色を帯びたのは千山万峰ではなく、正に人間の側に弾薬がなく食糧がなかったせいだと思わしめる。して見れば私の表現は尽く誤謬である。

前の引用の「万山千峰」が「千山万峰」と間違って写されている辺り大岡氏は疲れていたのかとすら思う、変に混乱した文です。前半はよいとしましょう。しかしどうしてそれが「私の（『野火』等での）表現は尽く誤謬である」となるのか、よく分かりません。要は、自分は自分の経験を自然そのものの変容であるかのように書いてしまったが、じっさいは絶望した人間に外界がその絶望の転写として「愁色を帯び」て見えたに過ぎなかったのだ、と反省しているということでしょうが、しかしすっきりしません。だいたい、続く「調べ魔」の詮索は、誰が一体何故「愁色を帯び」などという句を書き込んだのかをめぐる変にくだくだしたものだからです。大鳥の手書き原稿は残存せず、しかも、異文は実は大岡氏が最初に引用したものより前に執筆出版された本に出て来るので、そうなる異文は後者ではなくて前者だったことになり、原文はやはり「万山千峰愁色を帯び」となっていたのではないかと大岡氏は推定し始め、ついで、しかしもっとも古いと思われる写本も信用できるものではないからやはり違うのかと言い出し、結局何故「愁色を帯び」の句が紛れ込んだのか分からないとなるのですが、それでいてしかし、氏は妙な結論に落ち着くかのようで、つまりは、原文にあったかなかったかに関係なく、大鳥は「愁色を帯びた山々」という自然の変容を見たのだ、という結論に自分を収めようとするかのようなのです。要は、壊滅した敗軍の敗走者の目に外界はそれまでとは質的に、或いはほとんど存在論的に異なるものとなるはずであり、大鳥もまた自

分と同じように、或いは『野火』の「私」のように、敗走においてそうした変容の空間、壊滅した人間的社会の外、その「外」に入ったのに違いないという結論に偏執するかのようなのです。

前記のように（大鳥の）紀行は、彼が獄中の徒然に任せて、塵紙に記しておいたもので、明治五年の出獄後は棄てて顧みなかったようである。その後の工部大学校長、朝鮮公使、男爵大鳥圭介の経歴は、紋切型の明治の顯官のそれで、戊辰のことは、すべてこれ南柯の一夢にすぎなかったというのが、大鳥の感慨である。

しかし私は彼が日清戦争の口火を切った事蹟よりも、この『南柯紀行』中の眞実によって残ると考えたい。（『檜原』）

ここでの「『南柯紀行』中の眞実」（強調引用者）とは、紀行全体のことでなく（繰り返しますが大岡氏は「紀行」中、保成・檜原敗走の部分しか問題にしていません）、何よりもまず、敗走の中で大鳥が自然の変容を経験したということ、に係わっているとしか読めないのです。

……大鳥は敗走の極、属していた社会の完全壊滅の敗走の中で自然をも変容させる「外」の空間に出、その変容を見たのだ……それが（ほかの全てはどうでもいい社会出世の虚しい紋切型）大鳥の唯一の眞実だ……これが大岡氏の偏執だと思われます。これは私の勝手な深読みではないと私は思うので、何故かといつて続く最後の章で大岡氏は異様なことに、「檜原の山々が『愁色を帯びて』いないかどうか確かめるために」裏磐梯にわざわざ出向いた記録を書くからです。まるで、未だ檜原から大鳥の見た変容した自然が、戊辰の敗走の大鳥の去った後百年後になおその変容した姿で何か知れない亡霊のように、或いはセザンヌとサント・ヴィクトワール山との間に「愁色を帯びたサント・ヴィクトワールのタブロー」が残されたようにと言うべきでしょうか、ゴッホと最後の外界のあいだに「鳥のいる風景」が残されたようにでしょうか、或いはジャコメッティとモデルとの間にあの異様な塑像ブロンズ鑄造が残されたようにと言うべきか、ともかくそんな怪異として実存しているかのよう、です。

……出かけてみると檜原は明治21年の磐梯山噴火で出来た湖の底に沈んでし

まっており、戦後レジャー産業のテント村が散在し、一体は資本社会の自然収奪の基底である電力資本の配下になって、むろん「愁色を帯びた」山々など存在しない。このあたりの文章、奇妙なくらい詳細に社会資本の社会利益名目による自然の収奪の記述が続く。「水力日本の山間の水は、一石といえども無駄にはされてはいない。山中に水のあるところ、風景は『愁色を帯びる』ゆとりなぞないと覚悟しなければならないのである」（『檜原』）。

これに続く文章は末尾を断ち切るようなものになります。むろん、或いは『文藝春秋』という媒体を意識して「感傷旅行」風に終わらせただけとも言えて、うがち過ぎの解釈は深読みの滑稽になりかねませんが、ここでは文字通りに読んでおきたいと思います。檜原の探索を諦めた大岡氏は保成峠に足を向けます。そこは当時のままではないでしょうが人気のない曠野のままです。大岡氏の孤独な散策はここではもはや敗走者大鳥の亡霊を探るのとは違う、自分自身が生きた自然変容の亡霊を追うかたちになります。長くなりますが引用します。

（……）白灰色の山嶺は不吉であるが、近い低山はみな山容おだやかで、ここであつて酷烈な戦闘の行われたとは信じられないくらいである。いかにも山頂平坦、草の中を上る一条の小径が降りにかかろうとするところに、「保成峠」と書いた道標が横倒しになっている。前方に林がふさがり、二本松平野の展望なぞありはしない。

もっと行って見ようか、どうしようかと、逡巡が孤独なる散歩者を捉える一瞬である。自然は決して愁色を帯びてはいないが、私は（戦地からの）帰還以来、こんな人跡稀なところに足を踏み入れたことはない。一時間人に会わずに歩き通した覚えはないのである。常に安全な同胞を身近に感じつつ過ぎて来たのだ。（……）草はますます深く、樹は暗い。道を横切って、若い木が倒れている。頂上では道は二つに分かれていた。間違つた道を選んだのかも知れない。帰路を失うのではあるまいか。自分の足音が耳につく。（『檜原』）

『野火』を知る者はこの道行きの文がそこでの敗走者の歩行と同じであることに気づきます。じっさい大岡氏はおそらくは小説家の文飾ではなく本当にそこで、自分の敗走者の偏執、そこへの囚われを確認することになります。

道傍に二本の門柱の立つのを見た。これが門といえるかどうか。暗い樹の合間に、薄っすら緑の苔をつけた丸太が二本並んで立っているだけである。先は広く、林間に空地が開けている気配である。

突然比島の山中の記憶が甦った。逃亡中、山間の見棄てられた山地人の住居を見出した時の感覚である。私は何度もこれを説明しようとした。人気のない自然の中に、人間の痕跡を見る恐怖。

結局敗兵は怖れていた。それだけのことであった。（『檜原』）

末尾の「それだけのことであった」という吐き捨てるような語感にだまされないようにしましょう。これは自身の或る種の錯乱に対して大岡氏がよくやるシニカルな、距離感を偽装した投げ出しだと思われるからです。じつはおそらく「それだけのことだった」どころの話ではないのです。それは正に同胞の壊滅の中での敗走者が経験する煉獄、或いは地獄か、それについてはすでに書きましたが、ともかく社会から外れその外に出てしまったところか、ついには社会一般から追い回され狩り出され、さらにその外へ、「外」へと、あたかも監視独房の囚人が独房のありもしない奥、何か知れない重力点に向けて身を縮め、或いは身体そのものからすら敗走しようとするかのように、「外」へ「外」へと、ほとんど死への収縮なのか散乱なのかを渴望し窮迫する瞬間のようであり、それが再度もはや論理の整合など構わずに、大鳥の、というかありとあらゆる敗軍の敗走に確認して行こうとするかのような身振りだからです。敗軍とはその存在様態において、その「何処でも有り得ない何処か」、ロラン・バルトの用語を使用すれば「アトピア」空間へと出て行くはずの何かなのだ、と、そんな具合に言ってもいいでしょうか。そしてそれをこそ、或いはそれを見出すためにこそ、大岡氏は大鳥の敗走に無理やりのコンパッションを奉じようとするかのようなようです。……ともかく、『檜原』が重要なのは、なお未だ大鳥圭介という単独者を巡って書かれたものではありませんが、『野火』で分析的に書かれた敗走者の孤独で特異な存在論的(!)変異が、敗走して行く集団の状況へと拡張されようとしているという点なのです。つまり、孤独な個体ではなくて一社会体全体において敗走空間とは何かという問題の拡張が試みられようとし

ているという点なのです。大岡氏の仕事がいわゆる「歴史戦記物」を書きながらそれが例えば、有名な論争となった井上靖氏のそれや司馬遼太郎氏のそのようなもの、或いは書店に溢れる戦記物と本質的な意味で異質なのはその点だと思われまゝ。大岡氏にとって歴史の中で勝利や敗退の転変を重ねてきた社会といった転変盛衰のパノラマなど全くどうでもいいことで（そうしたことに關しては大岡氏は大方マルクス主義的な政治経済論的分析と地理好きの地政学で処理してしまします）、その興味というかむしろ偏執はひとえに、一社会集団が敗退と敗走の中で散逸して行き、その中で社会の外へ、或いは人間という枠組みの「外」へ出て行くその様相、本質的に自己防衛的な組織である社会が自己解体を内包しその自己解体へと自身を開いて行くとき何が生じているのか、その空間とは何を意味するのか、にかかっているのです。逆に言えば、自己解体を自身の属性として生きようとしな^い社会は氏にとって欺瞞的な組織にすぎず、社会はただその自己解体への受け入れ、自己解体空間への開けの瞬間にだけその欺瞞を離れ、その「眞実」へと還るかのよう^にに大岡氏はその偏執を進めて行くのです。眞実は、或いは社会の眞理性はその自己維持にではなくそれが根拠を失い散逸し散開するところにしかないかのように。再度、『花影』の葉子のように。

『保成峠』『檜原』で「敗軍そのもの」を描く試作を試みた氏は懸案の『天誅組』の執筆にかかります。大岡氏の特異な企画において『檜原』の大鳥は或いはまずい選択だったと見えます。大鳥は結局のところ根からの技術的実務的人間で、微塵も社会というものの正当性を疑うことのなかった人間だったと思われまゝ。彼にとって敗北敗走とは要するに機能不全に陥った社会ということにすぎず、壊れた機械は直せばいいと考える類いの男だったように見えます。大岡氏は軽く書き流していますが（私は敢えてその部分を引用しませんでした）、檜原での婦女子を含めた泥濘の敗走の中で実は彼は一人、手に入れた騎馬で移動するような男でしたし、檜原を越えるや仙台に向かい、榎本武揚の艦に乗船し、「戦後の政務へゲモノー交渉」的な駆け引き戦闘である函館戦争を生き延びて明治の冒険的実利社会（要は国民国家の資本・経済的自己保持と植民地主義）

に寄与することこそ男子の本分と見切るような男にすぎませんでした。大岡氏が共感を寄せようとした「保成檜原の孤影悄然たる敗兵大鳥」は、大鳥自身にとってはなんら本質的ではない、言わば人生のマイナス気運の一時期に——南柯の一夢に——しかすぎなかったのです（じっさい大岡氏自身時折それを本文に仄めかしかけますが、「先輩河上徹太郎夫人綾子さんの祖父」というのが言い止めになったのではないかと私は勘ぐってしまうのです）。……その点「天誅組」はさまざまな点で大岡氏の企画に適合する集団であり行動体であったように見えます。

……天誅組は（彼らは「天誅」の暗殺行動も意志も持たなかったので、周知のように「天忠組」と書くのが本来だったと言われています）後の明治天皇の血縁にもあたる公家、当時19歳だったファナティックな青二才中山忠光を例外に土佐を中心とした、士分格とはいえ農村管理官に近い下級武士を中心に組織された「天誅（天忠）革命隊」で、その主張は典型的な尊王攘夷王政復古、京都を中心に志士浪士の有象無象、土佐、薩長が描き出していた当時の時勢そのままの集団と言っているのですが、彼らには土佐、長州、薩摩といった雄藩上層の実利主義的建前と本音の区分はまったくなく、坂本龍馬的な新社会生成の実利的現実主義もありませんでした。ともかく彼らを捉えていたのは現行社会体制の欺瞞に対する直截な拒否であり、遂にはその、戦略的に言えば性急すぎた挙兵によって同志と頼んだ者たちからも疎んじられ見捨てられ、文字通り当時の社会全体から追われ追い回されるようにして敗走し、十津川溪谷に最後の陣を組んで壊滅して行きます。彼らはむろん社会改革を渴望していたのですから、新社会の建設を企画していたわけですが、しかしその渴望は、大地と天皇を直結させた素朴なミスティシズムを含んでいたようにも見え、ともかく功利的欺瞞性をまったく許容しない、と言うことは社会構築にはまったく無益な純粹主義を固執したように見えます。どちらにしろその激しい決意とファナティズムにも係わらず、むしろ幼稚と言ってもいい素朴さがあって、そんな集団の挙兵がその性急な行動にも係わらず40日間に渡って同志と頼んだ者たちからも見放されたかたちで抵抗し、紀伊の山中を敗走し、壊滅したわけですから。さらに……大岡

氏は天誅組に惹かれた理由に妙といえ妙な発言を再三にわたって書きつけていて、すでに引用しましたが繰り返しますと、『天誅組』に参加した農民的志士の集団が、十津川溪谷の紅葉の中で崩壊して行くさまに、一種の詩情を感じていたらしいのです」（『天誅組』あとがき）、というものです。この文は「あとがき」では前文に関係なく唐突に書かれたかのように書かれます。これではまるで悪趣味な「滅びの美学」の陳腐な歌舞伎絵めいた光景ですが、すでに『檜原』の末尾の「愁色を帯びた山々」に対する大岡氏の異様な偏執を——ということは『野火』に書かれた絶望的敗走者における自然変容への偏執を——知っている私たちとしては、その光景が単なる美的書割りなどではなくて、崩壊散逸した社会の「外」に広がる存在論的な、と言うとやはり大仰でしょうか、或いは「詩的空間」の現出に係わる偏執を含んでいると理解すべきでしょう。ここでも大岡氏の主題は天誅組の組成と壊滅を幕末の歴史の中に描き出そうとするものではなく、或いはそれだけではなく、そうした「詩的空間」に向けて歴史的出来事をメールシュトレームめいた渦のように描き出すことだったと想像されるのです。

しかし何故そのような偏執を大岡氏は示すのか？ それは『レイテ戦記』とどう関係するのか？ レイテの兵士たちはなるほど天誅組と同じように集団の壊滅を戦い死んで行った、或いはほとんど死んで行ったとして、しかし、レイテの兵士たちは、特に戦争末期において大部分の者は一種の無力な諦めの中で戦死を引き受けたので、天誅組のような意志においてそれを生き死んだわけではないでしょう。彼らは社会の命令に従って死に、結果として社会の崩壊を死んで行ったので、しかもその間、とうの社会は密かに自身の延命を賭けて裏交渉を探り、あまつさえ前線の兵士の死はその延命の為の捨て石と言っていい「社会戦略」の意図の駒ですらあったのです。「口では必勝を唱えながら、この段階では、日本の勝利を信じている職業軍人は一人もいなかった。ただ一勝を博してから、平和交渉に入るといって、戦略の仮面をかぶった^{メンツ}面子の意識に動かされていただけであった」（『レイテ戦記』）。つまり彼らは社会の崩壊を引き受

けながら死んだのではなくて、社会の延命に利用されて死んだのです。ですから、天誅組の崩壊とレイテにおける日本帝国軍の崩壊は位格が明らかに違うのです。一方は言わば純粹さにおける一集団一社会の壊滅であり、一方は最後の姑息な自己防衛－延命を計ろうとする社会の戦略的欺瞞の結果もたらされた捨て石的壊滅だからです。やはりレイテの兵士たちは社会の欺瞞に騙されて死んだのです。じっさい、彼らの死を英霊という美名に包囲して銃後の社会はのうのうと延命に成功したのです。彼らの死を無駄にしないためにもよい社会を作らねばなりませんというおそろしく欺瞞的な社会的愚劣において。……とすれば、『天誅組』を書きながら、大岡氏の企画はどこに向けて起動しようとしているのでしょうか？ それは如何なる経路で『レイテ戦記』に試みと繋がるのでしょうか？

唐突ですが、敗走者たち、壊滅に消えて行った者たちは、社会と如何なる関係を結ぶのでしょうか？ 今更と言われるかも知れません。と言うのも私はここまで縷々、敗走者たち、敗戦の敗走者たちは社会の「外」へ出て行く、と……つまり社会との関係はそこで切斷され、社会とは別の場所、どことも指定出来ない場所へと敗走者たちは移行し……消えて行く、と書いてきたからです。つまり敗走者と社会は異質な空間に分離され、関係を絶つものであるかのように。そしてそれはさしあたりはそうであるしかなく、自己保存と延命を本質とする社会が崩壊、壊滅、離散を本質とするだろう者たちとどのような関係を取り結ぶというのでしょうか？

しかし、それがどのようなかたちであれ取り結べないなら、レイテの死者たちを、その汚辱に塗れた死を「救い出す」大岡氏の企画は、或いは偏執と倫理は、失敗に終わることになるのではないのでしょうか？

ここで唐突ですが、大岡氏の『中原中也伝』を間に置きましょう（因に『中原中也伝』として纏められたのは1970年代ですが、復員後すぐに中原について大岡氏は書き始めており、この「伝」は『天誅組』から『レイテ戦記』に到るまで常にすでにその「背後に」書かれ続けていたと言っていいでしょう）。とって、その詳細に入る

つもりはありません。すでに書いたように、そこにおける「詩人であること」「詩的空間の住人」であることについて注視してみたいのです。或いはいっそ、「芸術家と社会」の関係を、とさしあたり言ってもいいかもしれません。

例えばここに、芸術という何か知れぬものを巡って交わされた、壮大といえは壮大、凡庸といえは凡庸な論争があります。アンドレ・マルローとモーリス・ブランショという二人の文学者の間に交わされた短い論争……と言うか対話なのでしょうか、ともあれこんな具合です。原書がないので記憶で書きますので細部の不正確はお許しを。

マルローの言辞はいつもながら胸焼けするような演説調ですがともあれ……

神秘は我々人間が宇宙の虚無の中に無意味に投げ出されてあることに存するのではない。そうした無力の中で、人間が、芸術という意志によって宇宙の虚無に抵抗してきたこと、そこに神秘は存するのである。(『芸術の心理学』——後『沈黙の声』と改題し加筆修正)

それに書評子として書評を書いたブランショはこの言葉に次のように註的反論を加えます。

なるほど芸術作品は宇宙の虚無に対する抵抗の壁面であるだろう。しかし芸術作品は同時に、虚無がわれわれを覗き込む眼差しでもあるのだ。

ここに「芸術」と訳した原文は«L'art»で、それだけなら「技術」と訳しても一向に構わないものです(欧米語には現代日本語のように「芸術」という限定的な語は存在しません。「芸術」はあくまで「技術」の派生的概念として存在するだけです)。ただここでは私たちが美術館と呼び習わしているものが話題となっているので「芸術」としたままで、「技術」と訳しても意味に大差はないでしょう。ともあれマルローとブランショの論争は「芸術」などという曖昧模糊とした語を巡って書かれているために莊嚴(?)に見えますが凡庸と言えは凡庸なので、例えば病院をじっと見て下さってもいい。そこは人間が病と老いと死という避けられない崩壊に対して抵抗する空間です。しかし、じっさいは人間は最終的

には死ぬことは避けられないので、病院という抵抗の空間はその抵抗の最終的な失敗の空間でもあります。病院は病と苦痛と老いと死を減速させることは出来てもそれを消去することは出来ないからで、その意味でそこは敗北の空間でもあります。病院に対して私たちが覚える頼もしさと不安という両義性はそこにあるでしょう。いっそマルローたちの論争の焦点である「美術館」を「病院」と置き換えてもいいかも知れません。そうするとマルローたちの論争が「芸術」というものに関する存在論的評価の論争ではなくて、同じものが私たちにもたらす二つの違う「効果」を語っていることが分かります。あまり適切ではないのですが「病院」という喩えを続けましょう。「病院」はそれが病と苦痛と死に抵抗し私たちに救い続けようとする空間として見られるとき、それは私たちの世界を維持し防衛してくれる前線であり私たちの世界の礎石のようなものとして見做されるでしょう。マルローの言っているのはこのことです。しかし一方、私たちの衰弱と死は避け難いものであり、その視点から見られるとき、「病院」は私たちの、ひいては私たちの世界の避け難い種弱、死、壊滅を突きつけてくる空間と見做されるでしょう。これがブランシヨの言っていることです。二人は対立しているのではなくて、同じものを別の視点から語っている訳です。

「病院」の喩えを離れて、「詩人」「詩的空間」に向かいましょう。詩人、或いは詩的空間が危険なものであることは周知のようにプラトン以来明言されてきたことです（別にプラトンでなくともいいのですが）。というのも詩的空間とは人間社会の縁、人間社会が常に曝されている虚無と言いますか砂漠と言いますか死と言いますか、ともかく人間的社会の脆さが露呈する空間に開かれる空間であり、詩人とはその住人だからです。ですから詩的空間の存在、或いは詩人たちは、「病院」と似た二重性を持つこととなります。詩的空間は、そして詩人たちは、常にすでに世界が崩壊の縁にあること、壊れやすく永続不能のものであることを想起させるが故に不吉な、忌避されるべきものとなります。彼らは世界の壊れやすさ、世界が常にすでに崩壊と壊滅に向けて、それに時空的に

包囲されてしか存在し得ないことを思い出させるのです。一方、言葉の「技術者」である詩人たちは、ちょうど砂漠に城塞の最初の礎石を置く者であるかのように、死、壊滅に対して言葉という不思議な城壁の最初の動作を行う、或いは行い続ける者たちでもあり、それ故に詩人たちは「ポエット＝生み出すもの」と呼ばれることになるでしょう。ここに詩人の二重性があります。彼らは、或いは「詩的空間」は、世界の壊滅と生成の中空、或いは壊滅と生成が直行する厚みのないガラスそのもののような存在であり、一方からすればそれは常にすでに世界の崩壊壊滅を想起させ、一方から見ればそれは常にすでに虚無に対して最初の抵抗の線を引き続ける緩衝地帯であり（ブランショはそれを「^パ・^ラ・^ン・^シ・^ョ」という巧い言い方で呼んでいます）、そのことによって辛うじて世界が壊滅から猶予され保護されてあることを開示する空間ともなる訳です。これが^{クリティカル}危機的と言われるのは、それがある限り世界は自身の壊滅の間近さを忘れることは出来ず、しかしそれが無い限り世界はその存立を開示出来ないという両義性故です。

……中原中也に大岡氏が見ていたのはまさにそうした男としての中原……と言うか、自身、世界の壊滅と生成の見分けがつかなくなったような場所にしか生きられず、それ故に「詩人」であるしかない者としての中原だったと思われるます。繰り返しますがどうしてもと言うなら、中原が大詩人であったかなかったかなどどうでもいいことなので（はしなくも嫌々ながら大岡氏はその論争に巻き込まれますが）、重要なのは中原が社会の縁、世界の崩壊の緩衝地帯に放り出されてそこから出てこれなくなった者としてあり死んで行ったということが全てだったと思われます。むろんそれだけなら一般社会から見れば（大岡氏にとっても）中原中也は人間になり損ねた「変な奴、すごく変な奴」にすぎないのですが、重要なのは中原が単なる敗走の非人間だったのではなく、その空間で、言葉をつむぎ、社会とその壊滅の中間地帯に何か知れない薔薇線のようなものを織り続けたということ、それが先ほども言った両義性によって、欺瞞の中にあたかも永世を保持出来るかのように君臨しようとする社会を告発し、一

方、その脆い薔薇線によって世界の生成の線を引き続ける意志のようなものとなりおおせるのです。大仰に言えば社会は中原的存在＝詩人によって自身の欺瞞性と脆さを思い知らされ、同時に中原的存在によってのみ、自らの組成の最初の、脆いが決然とした礎石を与えられることになるのです（むろん、あくまでも大仰に、論理的に（！）言えばということ、現実社会は中原的存在を意識して深奥において震え上がった感応したりなどはしないでしょう）。社会の礎石、ではありません。サン＝テクジュベリ風に言えば「人間の土地」の礎石でしょうか？ それとも違うようです。と言うのも「詩的空間」は本質的に「非社会的」空間であり、従って「社会的なるもの」というのが「人間」の定義であるならば、その空間にある者は厳密には「人間」とは呼び得ない別のものであるでしょうから。その呼び名を忖度しても始まりませんが、ともかく彼らは人間の社会の礎石を置くのではなく、両義的な経緯度線のようなものを置くと言えはいいでしょうか。そこにおいて社会は自身の属性として壊滅と生成、散逸と集合の縁を見出し、一種音楽的変奏のようなものとして自身を見出すのです（これまた、あくまでも論理的に言えばです）。再度繰り返しますが、このことにおいて中原中也が大詩人であったかどうかは問題となりません。それは、先走って言うてしまえば、壊滅する総崩れの敗軍の、その壊滅の前線の兵士たちが勇猛有能な兵士であったか脆弱で無能な兵士であったか善良であったか愚劣であったか、卑劣であったか真摯であったかなどどうでもいいことなのと同じことです。彼らは壊滅の中で線をそれぞれに許された範囲で引き続けた、それが全てです。中原中也は壊滅する社会に於ける或る兵士だった、そうであってもいいでしょうか。或いは孤軍の天誅組とでも。そして逆に、壊滅する社会の文字通り前線にあった兵士たちは、それぞれに中原中也的存在だったのです。

……こうして私たちは『レイテ戦記』に向けて、移動して行く手がかりを得ることになる、そう思います。

*

大岡氏は肝心の(?)十津川溪谷での壊滅を書かずにのこしたまま『天誅組』完成を結果的に放棄し、一挙に『レイテ戦記』の執筆に入ります。すでに早くから『レイテ戦記』を書くことは渴望に近い計画になっていましたが、アメリカ側の戦時資料が大量に公開され事実資料が入手可能になったことが直接のきっかけになります。

……しかし『レイテ戦記』に向かう前に、簡略に『天誅組』にケリをつけて(1)おきましょう。『天誅組』は『レイテ戦記』の準備という以前に、大岡氏が俘虜中にノートに書きつけた「ヤマト心の研究」の一環でもあったように見えます。もとより土俗的膠着を感性的に受け入れない大岡氏はヤマト心のような心性を受け入れるはずもないのですが、敗走の経験と俘虜の経験の中でそれに一定の分析をおこなう必要を感じたのでしょう。というのもヤマト心と曖昧に呼ばれるものは近代的な社会組織とは異質の性格を持ち、或る点では非社会的、反社会的な特性すら持ち、従って社会の外へと開く空間においてそうした心性がどのようなかたちでかそこに絡みついてくる可能性があるからです。じっさい、『俘虜記』の中で、一人の兵士が重症の苦痛の中で「天皇陛下万歳」を口にして死んで行った話を聞いて軽い衝撃を受ける場面が描かれています。……天誅組はファナティックと言ってもいい王政復古を唱えて組織され拳兵しますが、彼らのそれと、例えば勤王の志士の多く或いはとりわけ反幕雄藩の唱えるそれとは本質的に異なるものがありました。他の王政復古は多かれ少なかれ天皇を新制体制の指導の社会的中枢とするものでしたが、天誅組にとって天皇は幕藩体制において作動していた社会的経済的体制とは異質の、直接大地に結びついた非社会的な、言わば「異形の王権」だったと言っていいでしょう。天誅組の中心層が大岡氏が言うように下層の農民的志士群であったことがそれを強化したようです。言わば彼らは社会の彼岸に大地の地層のように広がりつつ屹立する「天皇」を奉じていたのであり、それが彼らの王政復古を幕末的な社会的現実主義とは異なるファナティックな純粋性へと蒸留して行くことにな

ります（三島由紀夫が注目した神風連のような集団も似た、或いはよりミステイックな王政主義を奉じますが、天誅組のような規模の軍事行動は起こさぬまま、或いは小規模の自殺的行動の中に消えて行きます）。彼らが尊王攘夷王政復古を唱えながら反幕雄藩や勤王志士群から遊離していったのはその点にあったかもしれません。保田與重郎のような「右翼的」文学者が天誅組に惹かれたのもその点にあるでしょう。大岡氏の「十津川溪谷の紅葉の中での崩壊の詩情」というヴィジョン(?)にもそのことが反映されているのかもしれませんが。「詩」というよりも和歌詩歌的空間と言ってもいいでしょうか（じっさい幕末の過激派(?) 神道や異様なまでに煩瑣に神美化した古今伝授思想といったものが政治行動に影を落とす例は頻繁にあったようです——もっとも、結局彼らの大方は口角だけの文弱の徒にすぎませんでしたし、軍事組織力はからっきしだったようです。一方天誅組はそこそこの文藝的教養を持つ者をメンバーに持ちましたがそれを軍事行動に内在させるほどではなかったようです）。そして或いはそのことが大岡氏をして『天誅組』を最後まで書かせなかった要因の一つであったと想像することも出来るかもしれません。「天誅組は、調べてくうちに彼らのけちくさいところばかり目に付いてきて」と氏は書いていますが、天誅組が社会の外に見出そうとした皇権的農村的共同体主義の残臭がそう感じさせたのかも知れません。もっとも、敗走と壊滅の中でそうした共同体的隔壁さえ散逸し解体に到ったとも言えるので、皮肉な経緯で王政復古の基盤まで崩壊させる結果になる、その点でも天誅組は異色だったといえるかもしれません。……つまり、天誅組はもう一步で、ヤマト的温帯樹林帯をノーマンズランドの荒蕪地へと破碎させる可能性すら帯びたのです（因に天誅組の少なくとも名目上の指導者の一人、皇族に近い公家であった19歳の中山忠光は、他の指導者が壊滅の中で戦死して行く中、十津川溪谷から新宮へと逃げ延びています）。

ともかく、大岡氏が天誅組に惹かれたのは、幕末動乱の中で大方が新たな近代的社会経済体制の構築へと行動する中、社会解体を内包した自滅的行動において、欺瞞を属性とする社会を閃光のように照射し、崩壊の隣接においてだけ開く「詩的真理性」の開けと彩りを、幕末の或る意味卑小な現実主義的姑息の

上に広げたという点にあったと思われます。

……大岡氏の文字通り畢生の大作『レイテ戦記』は太平洋戦争を描いた戦後日本の戦記文学の最高作と評価が定まったに見えますが、意外に評価の難しい本で、じっさい大岡氏に対して敬意を惜しまない者からも度々疑義を申し立てられる書でもあります。簡単に言えば、その書の中に度々あの戦争に於ける日本軍の戦闘行動に肯定的な言辭が読まれるという疑義、或いは戸惑いです。もっとも有名で度々議論的になるのは神風特攻に対する肯定的な言辭ですが、『レイテ戦記』というとその部分、といった具合に引用されるのでさしあたりここでは引用しません。例えば次のような言辭でも充分でしょう。

軍隊が敗北という事態に直面する時、司令官から一兵卒に到るまで、人間を捲き込む悪徳と矛盾にも拘わらず、よく戦ったのである。(『レイテ戦記』エピローグ)

『レイテ戦記』を書くに当って大岡氏が心血を注いだのはむろん可能な限り正確かつ詳細な資料と証言を収集し読み込むことにあったことは言うまでもありません。いったい如何なる状況においてあの敗戦を日本軍兵士は戦い戦死し、敗走し死んで行ったのか、それをミクロからマクロ、あらゆる焦点から書き残すことこそが氏の最大の懸案だったからです。69年に最初の連載を終え加筆訂正を加えて71年に刊本が出た後も度々細部の訂正や新情報を加え続けました。そしてしかしもう一つの懸案は、如何にして彼らの戦いと死を肯定するか、にあったのでした。あの戦争を正当化することなど問題になりません。あれは端的に愚劣で欺瞞的で陋劣な戦争だった、これは明らかです。当時置かれていた日本の経済的苦境、差別的外交による屈辱等々による正当化など問題になりません。第一、大岡氏は自己保存と自己防衛を自身の正当化とするという近代国家体制、社会体制そのものを欺瞞的と考える者だったので、氏からすれば、それが如何に他に選びようが無かったと論証されても、それが開戦を肯定する理由にはならない。愚劣な行為には愚劣なりに理由があるということは氏は認めます。しかしそれが愚劣な行為の愚劣さを善きものに変えることは出来

ない、これは氏には自明の理でした。……しかし、先に引用した大岡氏の文に書かれた限定条件に注視しましょう。すなわち、「軍隊が敗北という事態に直面する時……」。軍隊が敗北という事態に直面する時、その戦闘行動、とりわけ前線の兵士たちの戦闘行為に如何なる質的变化がおこるというのか、これが注視すべき問題となります。

軍隊が敗北という事態に直面する時……。これはもう少し精密に言い直す必要があるでしょう。間近い敗北が、余命が確定した病のように完全に明白である時、なお戦争が、戦闘が、継続されねばならなかった時、と。すでに書いたように、昭和16年末の真珠湾攻撃による開戦から始まった太平洋戦争において、日本軍が南方地区、或いはフィリピン・ビルマ（ミャンマー）を拠点とする地区において攻勢、少なくともかろうじて拮抗を保ったのは昭和17年までで、18年2月にはすでにガダルカナル島撤退、5月末にはアッツ島「玉砕」、完全な劣性が明らかになり、9月、焦慮した指導中枢が絶対死守を命じた絶対国防圏の設定が撤退行動を縛りつけてしまうことで事態をさらに悪化させ、その年の末には敗北への雪崩れは明白になります（いわゆる「学徒出陣」はこの年の12月1日に行われています）。19年の段階ではもはや絶望的な事態になっていたこともすでに書きました。日本軍兵士たちはもはや完全に決した敗北の、その絶望的状况の中でなお一年半余りの間、戦闘を行わねばならない事態に陥ったわけです。敗北はもはや後付けの認識ではなくて、国家中枢、さらには戦地全軍の中に明白な認識となっていて、その中で仮借ない近代兵器（絶対殲滅を機能とする兵器）の戦闘が継続されることとなります。勝利はむろん、守備域の防衛さえ困難になり、攻防は文字通り壊滅に到る死守になる（守るものそのものが次々に蒸発してしまう死守とはいったいなんでしょう？）。戦闘はもはやそれを運営し指導し命令する社会組織を守り維持するものであることをやめ、或いはそれを辛うじて延命する以上のもでは有り得なくなり、戦闘は緩慢な、或いは総崩れの敗走戦になり……つまりは決死の敗走戦という絶望的な戦いとなります。社会が自己防衛・自己維持を本質とするとすれば、もはやそれが不可能に

なったにも係わらず、なおそれが組織行動であるかのように継続されるとき、その行動は、有り得ない自己保存に向けての、言わば「虚無への抵抗」、自らの完全崩壊と壊滅を「運命」として自らに繰り込んで行く、或る意味矛盾した社会、社会であることを拒否する社会、自傷行為を繰り返す社会と言うよりもむしろ、自らの身体の外に出ようとしてその形態を崩壊させて行き、何か知れない別のものになって行く運動体とでも言うべき奇妙なものが醸成されて行くことになります。むろん社会の中枢は有り得ない望みの中で怪しげな新薬やらに飛びつく者のように自己保存を計り続けるでしょうが、その身体縁では、ひたすら自身の崩壊を確認するだけの為のような敗戦という戦闘が広がり続けるのです。或いはそこでは社会の自己分裂が起こります。と言うのも、戦線に広がるものたちはもはや自分たちの戦闘行動が自分たちを送り出した社会を守り保持するものではないことを知っており、社会中枢が（大本営 etc. が）自己保存を画策し命じれば命じるほどその愚昧は彼らにとってほとんど嘲笑すべきものになり、その愚劣・陋劣・卑劣は明白となるばかりだからです。言い換えれば、戦線のものたちは中枢の社会、自己保存と自己防衛に狂奔する社会中枢から密かに分離して行き、自分たちの戦闘を継続し始める……或いはし始めるしかない事態に置かれることになります。彼らの戦闘行動は、その死守は、その壊滅は、もはや社会中枢保持を目的としたものではなくなります。少なくとももはやそれを目的とした戦闘では有り得ないことの自覚における戦闘となります。ともあれここで、少なくとも戦闘の現実において、戦争を開始し戦闘を命ずる社会と戦線で戦闘を生き或いは死んで行く者たちとは分離され、全く異質の戦争が展開されることになります。社会中枢の思惑が何はともあれ自己保存に尽きるとすれば、戦線での戦闘はその思惑とは完全に異なるところで展開します。戦線はもはや自分たちの戦闘が何ものをも守らず保持せず、ただ壊滅のためだけに継続されていることの自覚における戦闘を戦うしかないからです。社会中枢と戦線は奇妙な批評関係に入ります。戦線は社会中枢の思惑とは別のところで自らの戦闘を、壊滅を了解しなければならぬ事態に置かれるか

らです。では戦線は何を目的に、敗北・敗走・壊滅の明白な戦いを戦うことになるのでしょうか？ 社会的存在ならざる天皇のために？ 或いは国に残された母親やら家族やらのために？ それも感傷の幻想としては有り得るでしょうが、戦線の壊滅は「国体」そのものの壊滅であって、そして自分たちの戦闘もはや自身の前線さえ保持不能のものである以上それは感傷のための感傷にかすぎず、兵士の孤独な自己説得では有り得ても、それ以上でも以下でも有り得ないでしょう。彼らは自身の壊滅そのものの中にその戦いと壊滅の意味を探らなければならぬことになるのです。

明白なものとなった敗北・敗走・壊滅の戦闘の継続において戦線は社会中枢の自己保存から事実上離脱して行きます……つまり、戦線は社会の外へと雪崩れ、そこに奇妙な前線を形成して行くこととなります。戦闘のための戦闘、敗北のための戦闘という異常なものが繰り広げられる前線が形成されます。それを維持するのはさしあたりはまず、兵士各個の動物的自己保存本能でしょう。級数的に増えて行く死亡率の中で、彼らの戦いは米国なら米国という具体的な国際戦争法上の敵ではもはやなく、死すべきものであるという事実との戦い、勝ち目の絶対無い戦い、言わば「運命」との、或いは「運命」に於ける戦いへと変異して行きます。彼らはもはや社会を防衛し保持するためではなく、「運命」というものにおいて戦う者たちへと変異します。死すべきものであるという「運命」に対する戦い？ さしあたりはそうでしょう。守るものとしては自らの生命しかなく、しかもそれ自体死すべきものである限り守りようの無いものを守るという戦い、アンドレ・マルローなら再度例によって荘重な調子で、「アンチ・デスタン虚無との戦い」と呼ぶだろうような、個の死という戦線まで縮小した果てしなく微細な一卑小な戦い？ 虚無との駆け引きの中で振動し消えて行くだけの戦い……それが超高空から見れば延々と波線状の前線を繰り広げる戦線であるけれども、近づけばただ個の一点一点にだけ拠点置いて散らばった戦線を成すこととなります。とは言え戦場では個の戦線は隣接する他の個のそれと密接に関係しますから、個々の孤独に閉じられた戦線は言わばライプニッツの

な幾何学（！）で連絡し、そこに薔薇線状の前線を形成します。絶望的な敗走の敗軍がなお或る種の「連帯」集団であり続けるのはそれ故でしょう（そこで「連帯」は、それがすでに社会の縁のさらにその外において結ばれるのであってみれば、もはや社会関係ではないでしょう。どうでもよいことですが、フランス人なら«amitié」とでも呼ぶでしょうか）。死すべきものであること＝「運命」との戦い、或いは「虚無」との戦い……むろん、「運命」も「虚無」も何かしれない敵＝他者として川の向こうや森の中に潜むのではなくて戦う者自体に内属したものであり、しかも定義上戦いようのないものです。可能なのはただそれを敗走と抗いによって減速させることだけで、私たちは確実に負ける。負ける、と言うか、自分の影の上に降りるように、それに一致する。私たちは死体になる。……少し先走り、レトリックが過ぎました。話を戻しましょう。

……確実な敗北の中でお戦闘を、自身の確実な崩壊と壊滅に向けて続けなければならない事態に置かれた軍隊は、もはや自己保存という社会の論理とは異なるところで機動し始めます。もはやそこでは社会の自己保存の欲望による自己正当化やスローガンは空虚な枕詞程度にしか意味を持ちません。そこでの論理はただ、確実な壊滅を受容しつつそれを遅らせることだけであり、しかし結局のところそれは壊滅の緩慢化にすぎませんから、最終的にはその壊滅の確実性を受容すること、であるでしょう。要は、われわれは死すべきものであるという「運命」を生き、「運命」に従って死ぬということの受容であり、言い換えれば、確実な敗北を戦う軍隊は恐ろしいほどに加速された残酷なかたちではあれ、生れ生き死ぬということに要約可能な、というかそれ以外に要約の有り得ない、私たちの剥き出しの生と同じものとなるのであり、全面的敗退における戦線の兵士たちは、近代戦争が社会の引き起こす政治経済的な自己保存の極端な形式であるとすれば、それとは切り離された空間、死すべきものとしてあるという簡明な「すべての者の運命」の空間の中に置かれ、それを生き、死ぬ以外ないものとなります。大岡氏が彼らは「よく戦ったのである」と書く時、氏が言おうとしているのはこのことでしょう。彼らはその時点で、国家社

会の引き起こした戦争，国家が「国家と資本家の利益のために」（『レイテ戦記』エピソード）引き起こした戦争を，その正当化の元に戦ったのではなく，ましてやその社会を支持し護持し延命させるために戦ったのではなく，死すべきものであるという「運命」の受容として「よく生きた」のであり，死んだのである，と。それが大岡氏の，少なくとも第一に，言おうとしていたことだったと思うのです。なるほど彼らは国家の引き起こした戦争の無益な犠牲者ではあったでしょうが，それは彼らが戦場という過酷に加速された「人生」を，それぞれに可能な「努力」^{コナートゥス}において生き死んで行ったこと自体とは無関係でなければならない。彼らはその時点で，戦争＝社会の手先として戦ったのではなく，その犠牲者として死んだのでもなくて，彼らの「運命」を生き，死んだのであるということ，これが大岡氏の，戦争の死者たちへの，第一の，肯定であるでしょう。……重要なことは，こうした言明が，論理的には敗軍においてのみ可能であるということです。と言うのも，勝者の軍隊においては，軍事行動はその全てが勝利した社会，それを組織し命じた社会に帰され回収されるからです。そこでの戦闘，そこでの死者は全てそれを命じた国家の，社会の，その社会経済のそのエゴイスティックな自己保存の意志に内属するものとしてそこに回収される。要するに勝利した社会の軍事行動に於ける死者たちは，国家社会の自己保存と延命と永世のために戦い死んだ者となるのです。なるほどそこでの死者は国家を，社会を守った英雄として歓待されるという点であたかも荣誉に煌めくかのようです。しかし，逆に言えば彼らは自身の生と死を社会に収奪され……つまりはその欺瞞の中へと呑み込まれるのです。その一見した輝かしさは，「人生」を社会に収奪された者の偽の代償であり，言わば荣誉奴隷の煌めきに過ぎない。勝利した国家の兵士たちもまた，戦場では個々に彼ら自身の「運命」をその無残の中で「よく生き」「よく戦った」のだとしても，敗者の兵士たちと違って如何にも軽々と，国家はその生をあたかも国家自身の力の顕揚であるかのように収奪するのです。一方，敗者の死は如何にも汚辱に満ち荣誉も救いもない無駄死にと見えますが，しかし，逆に言えば彼らの戦いと死は彼

ら自身の「運命」に返され、その卑小と汚辱のままに、それ自身によって生きられたものとして彼ら自身に返されるのです。彼らの戦いと死は彼らにそれを命じた国家・社会の愚劣とは無関係であり、彼らの荣誉とは、国家・社会によって如何なる荣誉も与えられなかったことにこそなければならぬのです。

……これがおそらく大岡氏が第一に言おうとしていたことだと思います。ですから、「彼らはよく戦ったのである」と書く時、大岡氏は彼らの戦いを褒め称えそれに荣誉を与えようとしているのではなく、彼らの戦いと死をそれが本来あった場所へと返そうとしているのです。つまりは戦争の手先と呼ばれることからはずらぬ、その犠牲者と呼ばれることから、或いはさらに、よりいっそう、彼らを「戦後社会の礎として死んで行った英霊」として再度、巧妙な詐欺めいた甘言で社会に回収しようとするところから彼らを引き離し、彼ら自身の場所へ返すこと、が大岡氏の、比島敗走の「連帯者」たちへの、「レイテ」の者たちへの、応答であろうとするのです。

しかし、大岡氏はやはり何らかのかたちで彼らを「今」に呼び起こそうとしてもいます。「今」の私たちに彼らの声を届けようとしてもいます。じっさい、『レイテ戦記』を書き始める決意をした有名なエピソードがあります。或る夜テレビを見ていたらフィリピン戦没者慰霊の遺族団が銀丸丸という船で現地に出かける画像を見る。大岡氏が戦時にいた島が映る。大岡氏はそれを見て震撼されて、有名な詩を書きます。詩としてはあえて引用するほどの出来ではないのですが、要するに、死んだ戦友に呼びかけ、帰って来い、俺の元に、幽霊になってでもいいから帰って来い、という切迫した呼びかけの詩です。彼らを呼び返さねばならない……これが『レイテ戦記』の叫びになるわけです。こうした意図は『檜原』や『天誅組』或いは最後の書になった『堺港攘夷始末』のような氏の「歴史物」すべてにあったのですが、それが『レイテ戦記』のように叫びにまでいたったことはない。レイテの者たちを呼び返さねばならない……彼らを彼らの戦いと死の場所に返すだけなら、結局のところ彼らは過去の中に収められ、その沈黙の中に還って行ってしまっただけですから。では彼らの

何を「今」に呼び起こそうとしているのでしょうか？ 彼らの個々の詳細な戦いの或いは病死の事故死の自殺の自決の無駄死にの勇壮な或いは狡猾な戦いと死の事跡でしょうか？ 彼らがどこでどう戦い（或いは戦うことなく、そのいとまもなく）、どう死んで行ったか、そのありとあらゆる事実の検証でしょうか？

それもあるでしょう。しかしそれは歴史家の仕事でしょう。大岡氏は小説家です、文学者です（どちらも座りの悪い空疎な明治の日本語の職業分けの造語にしか過ぎないので、空虚ですが）。端的に言えば死と生の窮迫したはざまに漂うものすべての「味方」であり同道者であることを仕事とし倫理とする者です。それが成されなければなりません。つまり、生と死の窮迫したはざまからではなく、そのはざまそのものとして彼らを招来しなければならない。文字通りの意味でのアポカリプスを実践しなければならない（アポカリプスは言うまでもなく、「生と死のはざまそのものを覆う覆いを取り去る」ということを意味するギリシア語です）。マルクスとは違う意味で（?）、彼らの亡霊を亡霊として招来し、「今」に跳梁させなければならないのです。

死と生の窮迫したはざまに漂うものすべての「味方」であり同道者であること、これが「小説家」、「近代小説家」の条件であると思います。死に瀕したものを描くこと？ それならばホメロス以来ありとあらゆる「文学」の性格で特に「近代」の特性ではありません。それは「社会」の形成とそれとの関係において形成される或る特性です。^{ル・モンド}社会の中に文字通り「人間として」登記され死んで行くことが「人生」であると理解しますと、逆に言えば「社会」に登記されず、その外に置かれたものは「人生」を持たないことになります。いや一応人間であると見做されるでしょうし、それなりの一生を送る者とは見做されるでしょうがそれは「名のない」半ば獣に近いものとしての一生で「人生」とは見做されない。言い換えればそうした者たちは、生と死の窮迫の中を生きる「名を持たぬ一種の獣」に分類される訳です。じっさい18世紀以前の文学は（英国だけすこしタイムスパンと性質が異なりますが）、そうした者たちを「人生」を持たぬ故に描くに値しないとして背景の薄闇の中に置きました。18世紀以前の文

学は大方、「社会」に生きる者たちだけからなる世界の「味方」だった訳で、そこに死の窮迫が描かれる場合でもそれはあくまでも「社会人の死に方」の範囲内の出来事だった訳です（ちなみに、ラブレーがいるじゃないかと言われましようが、ラブレーの描き方はアンドレ・ブルトン風に言えば「坊主が獣＝民衆を見て愉んでいるに過ぎない」一種の怪物珍獣博物学的書き方で、決して「社会の外者」の同道者ではなかった）。それは乱暴にいつてしまえば、18世紀以前の世界が「社会の内部」だけで、その外は遠ざけておけばやって行ける世界だったからでしょう。外はあくまでも背景として存在しそれ以上でも以下でもない者でした。それが十八世紀末から十九世紀以降、つまりは「近代」と呼び習している時期以降変質する。民衆革命のお陰というかそれに伴う納税システム、国民国家の形成で、それまで「社会の外」に置かれていた者たちがすべて「社会人」の登記を受けるようになった。その結果すべてが「社会内」に囲い込まれた訳で、「社会の外」はなくなったと言っていい訳ですが、具体的には非社会性格と見做された者とか精神病患者とか無職浮浪者とか女子供といった、「社会に登記されながらそれには完全には属さない・属せない」者が存在し、彼らは言わば「社会内の異物」半ば社会に属しながら半分その「外」に属する者となり、しかもそれはともかく社会内をあたかもゾンビのように歩き回っているわけですから風景の薄闇に押し込める訳にも行かず、その存在は言わば社会を悩まし始めます。ゾンビのように、というのは、彼らが「社会」という「人生」に半ば属しながらしかしそこからの陥没者として半ば「獣＝死者」のようなものと見做されたからです。近代の文学者たち、少なくとも「全ての者」を描くことこそ文学であるとした倫理を持つ文学者は「近代」において何故かその「全ての者＝社会人」から或る者たちだけが外されていることに注視します。彼らは善意においてそれらの者を「社会人」として遇するためであるか、或いは「全ての者」と言いながらそれらの者を「非社会人」として排除する近代社会を批判し揶揄するためであるか、様々ですが、ともかくそれらの者たちの住む空間の方へと隣接し、遠くか近くか、或いは没入的にか、そこに向かい、それら

の者の「同道者」となって行きます。つまり彼らは「社会」に属しながらその「外」へとはみ出し、半ば「人生」半ば「獣＝死者の生」のはざまにある者たちの「同道者」となります。近代文学が誕生する訳です。大岡氏が熱愛したスタンダールもその典型で、彼が描いたジュリアン・ソレルやファブリス・デル・ドンゴはまさに「社会人」と「獣」の中間の存在として社会の街路を歩き走り抜け、社会を壊乱しその「外」に走り去って行く異形の者として描き出されます。端的に言えば、「近代小説家」は、「社会の「外」」に属する「ほとんど獣＝死者」の同道者であり、それが大岡氏の出発点であり断固とした文学的倫理であり、それはすでに太平洋戦争以前、フィリピンの敗走経験以前においてそうだった訳です。彼らを言葉の中に招来し跳梁させること、が、氏の倫理の出発点だった訳です。

……そんな大岡氏が、生と死の窮迫のはざまの者たちの「注視者＝同道者」どころか、敗軍の壊滅を敗走する者となる、まさに窮迫者そのものとなり、その囚われのまま生還したのであってみれば、氏の偏執＝倫理の場は決まります……彼らを招来し、跳梁させねばならない。

ここで『野火』の主人公が置かれた窮迫を思い出してみましょう。彼は孤独の敗走の中で、敵ばかりか「同胞」の社会からも追い回され追い詰められるという現実的かつ強迫観念的恐怖に襲われたのでした。それは『檜原』で大岡氏が再体験した恐怖、「人気のない自然の中で、人間の痕跡を見る恐怖」にまで繋がります。敗軍の敗走者、と言うか、死と生の窮迫のはざまに、「社会」の外に置かれた者にとって社会というものそのものがついに彼を追い回し追い詰め壊滅しようとする何ものかとなるのです。彼に出来ることはただひたすら、社会から、遂には人間的なるものから逃げ続けること、敗走に敗走をかさねることしかないのでした。遂に自分を「天使」かも知れないと口にするにいたるまで……。 「天使」、と書いた時、大岡氏が何を想念していたかははっきりしません。「神に栄えあれ」で終わる『野火』において、ついに人間的なるものを超えた何かへの「到り」があって、その過程で思わず「天使」の一言が主人公

によって口にされたということ、それ以上のイメージがあったか、忖度は難しい（ちなみに大岡氏自身そこで「神」と書いてしまったことに後に拙速をみとめていますし、『野火』が映画化される時監督の市川崑氏との間でこの点をどうするかで意見が分かれ、「神」のエピソードを消しています）。しかしここで私たちはそれを文字通りにとり、いささか強引に或るイメージを導入してみましょう。例えば、リルケによる「天使」、『ドゥイノの悲歌』の有名な、「すべての天使は恐ろしい」という詩句です。リルケの精妙な長詩の真意を忖度する場所ではありませんから単純化しますが、リルケの天使は人間的なるものへの躊躇ない破壊を宣告するものとしてあります。天使は「美」であるけれども、それは天使が至純なるものに属するが故にであり、逆に言えばそれは至純を汚すものを容赦せず、それ故に「なぜなら美は恐るべきものの始めにほかならぬのだから。われわれが、かろうじてそれに堪え、嘆賞の声をあげるのも、それは美がわれわれを微塵にくだくことをとるに足りぬこととしているからだ。すべての天使は恐ろしい」（『ドゥイノの悲歌』手塚富雄訳に拠る）、と書かれるのです。したがって、『野火』の主人公が自らを「天使」と呼ぼうとする時、彼はついに社会から、さらには人間的なるものから逃げ続けることをやめ、と言うか、その追い回しに不意の激怒に駆られ、逃げ得ないのならそれを破壊せよ、という決意そのものへと変わるということを意味するでしょう。じっさい、『野火』の主人公が自らを天使と呼び激怒と変わるのは人肉を喰らう殺人を行う者の目撃においてであり、彼はついに人間的なるものへの反撃、その壊滅そのものの渴望と化すのです。敗走者はついに、純粹の名における、或いは同じことですが「真理」の名における、ありとあらゆる人間的なるものへの破壊の渴望となろうとするのです。……むろん、自身人間的なるものの重力の圏内の卑小なものに過ぎないのである以上、破壊は自滅的な攻撃として行われる以上のものとはなり得ないでしょう。しかし、破壊は渴望されるのです。この、徹頭徹尾愚劣な営み、つまりは戦争を化肉として孕んだ全てへの激怒として……敗走者はついに人間的なるもの全てへの激怒の表現を求めることになる。それはもはや米軍という具体

的な敵に対するものでもなければ自分をその窮迫に送り込んだ社会＝国家へに
対するものでもなく、自己保存を正義と言いくるめる愚劣によって機動しつつ
あるありとあらゆる社会的なるもの、あらゆる人間的なるものに対してです
……しかし、抽象を破壊することは出来ませんから、それは一見具体的な対象
に向けて繰り出されざるを得ない。目の前の敵と呼べるものへ、です。

……ここに『レイテ戦記』のもっとも問題的とされる章を思い出して見たい
と思います。言うまでもなく、第10章「神風」の、神風特攻のくだりです。む
ろん大岡氏のことですから、その章は、如何にして神風特攻が生成され攻撃作
戦にまでなったのかの経緯が詳細に語られ、そしてそれを決定した司令部の愚
劣を強く指摘します。当時すでに飛行士の技術の訓練上の低下、機体の劣化等
で通常の航空隊による攻撃においても出撃はほぼ撃墜死を意味し、そこから練
られた神風特攻は敢えて言えば攻撃の効率的簡略化に過ぎないと言ってもいい
ものでした。しかし蓋然性の高い死の飛行とあらかじめ死が決定された飛行と
は自ずから異質です。しかもはや戦況悪化で済む状態ではなく完全に敗北は
決していたので、初期はともかく沖縄戦必至の段階では無益とすら言えない愚
劣な攻撃でした。それを正確に大岡氏は記述します。しかし、知る人も多いた
ろうように大岡氏は次のように書き記すのです。有名なくだりですが全文を引
用します。

しかしこれらの障害にも拘わらず、出撃数フィリピンで400以上、沖縄1900以上
の中で、命中フィリピンで111、沖縄で133、ほかにほぼ同数の至近突入があったこ
とは、われわれの誇りでなければならない。

想像を絶する精神的苦痛と動揺を乗り越えて目標に達した人間が、われわれの中
にいたのである。これは当時の指導者の愚劣と腐敗とはなんの関係もないことであ
る。今日では全く消滅してしまった強い意志が、あの荒廃の中から生まれる余地が
あったことが、われわれの希望でなければならない。(『レイテ戦記』第10章)

これは、どう留保を加えられたものであれ神風特攻を美化し褒め称える文章
であり、それが問題視されることになった訳です。しかし私たちとしては、そ

れを別の視点から読み直して見たいと思うのです。神風特攻の飛行士たちは軍の命令にしたがってもはや空疎で愚劣でしかなかった作戦に命じられてそれに従ったのではないし、或いは悲痛な思いで国家、家族、祖国の最後の防衛と自己保存のためにそれに従ったのでもない、と。彼らは敵国米軍に向けて最後の捨て身の勲の攻撃に出たのでもない、と。彼らは人間的なるもの全て、そこに含まれる愚劣全てに対する激怒として、その表出として、「敵」に、人間的なるものすべてという「敵」に、自滅的壊滅の渴望を賭けて突入したのだ、と。彼らはほとんど人間的なるものすべてへの仮借なく留保ない天使的な激怒において彼らの倫理に従って彼らの総攻撃をかけたのだ、と。戦争という愚行全てに対する激怒、それを自己保存の正当化によって組織化していた社会的なるもの、人間的なるものの本質的欺瞞性への憤怒において孤独な総攻撃を仕掛けたのだ、と。そうであるとすれば、大岡氏の「われわれの誇りでなければならぬ」或いは「われわれの希望でなければならぬ」という妙に屈折した表現は違う視点から解するべきものになります。「われわれ」とはもはや日本人のことではない。ほとんど自らも天使の視点に属そうとする者の「われわれ」であるでしょう。それは、「敵国米軍」に決死によって自爆した日本帝国軍人ではなくて、人間的なるものの欺瞞性に対する激怒、純粋と真理において飛散した者の、何処にも属さない孤独な同盟の表現、真理への意志の表出として銘記されようとしているそう想像されるのです。彼らは米国という敵に対してではなく、かといって「祖国」を名乗る者たちにしたがってでもなく、それら全てを含めたものたち全てに対する激怒として爆砕し、そのことをこそ大岡氏は「誇りと希望」として、天使的怒りへの同道者として、書きつけるのです。……ともあれ、それこそが壊滅の中に自らの存立を見出そうとした敗兵にして敗走者たちの、生と死の厚みのない如何なる猶予も出口もない者たちの純粋な意志、真理への意志、真理への勇氣として、「希望でなければならぬ」のです。……そして、大岡氏は、それをこそ『レイテ戦記』という巨大な網目の中から聞き出そうとするのですし、それをこそ「今」ここに招来し跳梁させようとする

るのです。

敗軍の、社会の外へと弾き出され敗走し、ひたすら壊滅へと潰走して行く者たちは人間の輪郭を漂白して行くかのように天使化して行きます……むろん文学的すぎる比喩でしょう。或いはハイデガーが何処でか書いていた（記憶の引用ですから不正確ですが）存在論的窮迫の、「生が死の方へと弾け飛び、死が生へと弾け飛ぶ」そんな界域とでも言った方がいいでしょうか。どのみちじっさいは、例えばフィリピン群島の（或いはまた十津川溪谷の）林野の泥濘、血と糞尿と腐肉と死汁に搦まれた汚辱の潰走であり死であったはずですが、それが大岡氏によって悲惨の現実として呼び起こされるだけではなく、さらには窮迫におかれた、何処にも回収し得ない真の意味で孤絶した戦いの死として呼び起こされるだけではなく、「今」の私たちに向けて、ありとあらゆる社会的なるもの、人間的なるものへの疑義、或いは激怒として招来されるのです。……招来される……それだけならやはり結局それは「人間の愚かしさへの警鐘」などといった空疎なコピーライティングに回収されてしまう類いのものでしかないかもしれません。だからそれを、招来するだけではなくて跳梁させねばならないのです。文学にその力があろうとなかろうと、それを意志することが「小説家」の倫理である以上、少なくとも自身ありとある敗走の潰走の同道者であるしかない者、或いはリルケ的な意味での天使の隣接者としての「小説家」の倫理である以上、意志されるのです。

……彼らはありとあらゆる人間的なるものへの憤怒、激怒として招来されます。その時、大岡氏によって描き出された『レイテ戦記』は、詳細に膨大に、恐ろしいほど複雑なものとして超高空から描き出され分析された巨大な軍事行動は、人間が自己保存と自己防衛のゾーンとして、近代以降、自身をぴったり覆うようにして形成し管理し複雑に組み合わせ経営して来た政治経済的、医療的、福祉的、法的 etc. etc. 組織の裸に曝された連動システムの透視図そのものとなり、その残酷で無慈悲で老獪で愚劣で吝嗇なシステムの機動の透視図そのものを文字通り目に見えるものとし、そしてその中を、それら全てを粉碎し

ようとして飛び交う汚辱に塗れた卑小な天使群、もはや日米とかごごかしい区別ない天使群のような敗走者、潰走者の、肉の色をした無数の点のありかを、その動きの悲痛な切迫のありかを、その光跡を指し示すものとなります。『レイテ戦記』は、将棋やチェスや囲碁の棋譜のような、互いの持ち駒や陣地の増減を巡って吝嗇なゲームを繰り広げる戦争の教訓的なパノラマなどではありません。そこにあるのは互いに互いの覇権を巡って、その勝敗を巡って自身の巧妙さに恍惚とし、或いは冷徹に作動する二つの社会の光景ではなくて、ただ一つの人間の社会、一つに絡まって自分で自分を捕食しながら自分を保存し増殖しようとする人間の社会の作動であって、そしてそこを夥しい激怒の天使群、生と死の窮迫のはざままで今死のうとする者、病、壊疽、嘔吐、腐臭の中を這う者、恐怖に怯える者、隠れながら焼死する者等々等々からなる激怒の天使群が蠢き、ありとあらゆる社会的なるもの、人間的なるものへの激怒と憤怒において壊滅しようとする、その光景なのです。大岡氏はそれらの天使群こそを招来し、そして跳梁させようとするのです。

ありとあらゆる人間の社会への激怒、これが大岡氏が『レイテ戦記』に書き記し、招来する「レイテの天使群」の本質です。例えば神風特攻の飛行士たちは米軍-敵艦を爆砕するために飛翔したのではなく、人間的なる社会を粉砕するために、抑え難い激怒において飛翔したのです。したがって、その激怒の対象は今の私たちでもあるでしょう。「英霊たち」の「戦後社会」への怨念に満ちた怒り？ そんな矮小なものでは有り得ません。そんな或る日の過ちへの怨念程度の激怒など問題になりません。天使は時空の限定を持たない。したがってその激怒は文字通りありとあらゆる人間の社会に向けてのものであり、その仮借ない破碎としてあるはずだからです。その激怒は人間的なる歴史全体に向けてのものであるはずなのです。

レイテ島の戦闘の歴史は、健忘症の日米国民に、他人の土地で儲けようとする時、どういう目に遭うかを示している。それだけではなく、どんな害をその土地に及ぼすものであるかも示している。その害が結局自分の身に撥ね返って来ることを示し

ている。死者の声は多面的である。レイテ島の土はその声を聞こうとする者には聞こえる声で、語り続けているのである。(『レイテ戦記』本文末尾)

大岡氏の言葉は抑制されています。あたかも、あの過ちだけは繰り返さぬようにと、私たちの社会に、一つの或る歴史の誤謬を論すかのように。しかし、その抑制に安心しないようにしましょう。ありとあらゆる人間的な社会への激怒としてあるものを、どうして「或る社会」への教訓として論すことがありえるのでしょうか？ それもまた社会にはかならないのに？ まるで私たちの社会にだけは天使が急に穏やかになって、ただその激怒を教え諭すだけに留めてくれるかのように？ 天使たちは時間の限定を持たず、例外を持ちません。彼らは私たちの社会がなおやはり、或いは一層巧妙に、自己保存と自己防衛だけを自身の正当化とする社会である以上、私たちの社会をも許しはしないでしょう。私たちの社会もまた、天使たちの激怒の対象であり、破碎の対象であるでしょう。天使たちは、と言うか、再度具体的に戻せば、レイテの土、そこを覆った生と死の窮迫のはざま、そこに生まれた「新たな天使」(ベンヤミン)たちは、その激怒を継続させ、私たちの社会への告発をやめず、その破碎の仮借ない轟としてあるでしょう。それをこそ大岡氏は「小説家」の倫理として招来し、今ここに、跳梁させることを意志するのです。

陰鬱な社会憎悪？ 終末論的な予告に憑かれた憎悪？ 自分たちの受けた苦痛への代償のいまさらながらの請求？ そうではなくてそれは、私たちへの或る共闘の誘い、或いは招致としてなのだろうと思われまます。スタンダール風に慎ましい(!) “for a happy few.” における、と言いましょか。思い出すべきなのは、氏が神風特攻を巡って、「われわれの希望でなければならない」と書いていた、その真意です。

再度『野火』の主人公を思い出しましょう。彼はありとあらゆる社会、「社会一般」からの廃棄、さらにはそれによる追い回し、死にまで到るだろう追い詰めの中で、その反撃として天使と化したのでした。むろんそれは狂気と表現されるしかない錯乱に過ぎないと言えるでしょうし、まさに大岡氏はそのよう

に設定したのです。ともあれしかし、彼はまさに天使となることにおいて社会への反撃、それ以前に自分の存在理由を見出すのです。その存在理由とは、生と死のはざまにあること、つまりは崩壊の縁にあって存在し、存在者は全て崩壊するということの単純といえは単純な承認において自身の真理を見出すということ、そしてそれが自分を追い詰めた社会の欺瞞と愚劣に対する純粹さ、ほとんど純粹さと呼び得るだろうものによる反撃の拠点となるということです。数理的な意味で(!)ゼロを純粹と仮設すれば、生と死の窮迫のはざまを潰走し続ける彼はほとんどゼロであることにおいてほとんど純粹となり、或いはほとんど真理であるものとなり、そのことにおいてありとあらゆる欺瞞と愚劣を告発し反撃し得る根拠そのものとして自分を見做す空間を取得するのです。むろん客観的にみればたかだか靈長類のと言うか敗走する軍団の一個体以上でも以下でもない或る者の瞬間に過ぎないのですし、成し得ることはほとんどないに等しく、虚しい、空疎な権能でしかないのですが、しかしともあれ権利上彼は全人類の欺瞞に激怒しそれを告発し得る権能をその窮迫の中に取得する。それはほとんど死、或いはおそらく文字通り死を代償にしか得られない真理性であるにしても、彼の窮迫の存在理由となり、それが聴き取られようと聴き取られまいと、ありとある欺瞞に対する弾劾と告発と反撃を彼の使命と化す。つまり彼は逃げ場のない窮迫の中で始めて、真理への勇氣と化すのです。もはや彼にとって純粹さや真理は机上で戯れることの出来る知的選良の玩具ではなくて、或いは面壁の高僧や修行僧やら古代の「哲学者たち」の選択でもなくて、彼自身が置かれた文字通り無残な窮迫の唯一の猶予であり、彼にはそれしか残されていない。それは留保なき汚辱の「死に狂い」に残された唯一の余白・猶予なのです。

そして、神風特攻はまさにそうした場所における「真理への勇氣」において、その限りににおいて、「誇り」でなければならず、「希望でなければならぬ」のです。彼らは国家の威信や「国体」の幻想的な悠久のために「敵」に自爆の空虚な攻撃を仕掛けるのではない。或いは天誅組における天皇がそうで

あったように、彼らはそうした何かのために消えて行ったのかもしれないとして、しかし、彼らの中で天皇やら国体やらはその瞬間に単に真理の仮面としてあっただけであり、或いは銃後の愚昧な中枢が口にしたかもしれない薄笑いの欺瞞におけるそれとは全く異質のものとしてであったとして、ただ真理への道標の装飾として実質を与えられつつ、真理においては鱗割れて消える仮面だった。大岡氏が彼らを招来し跳梁させようと意志するのはその意味においてであるでしょう。裏切った社会への怨念、社会の愚昧への、かつて受けた不当な暴力のように忘れられないトラウマの復讐、そんなことはまったく関わりない。社会への激怒、憤怒は真理の付帯的属性であって、重要なのは真理への勇気、なのです。

むろん大岡氏が、すべてことはそのようであったと信じていたはずもないでしょう。戦場に於ける死であろうと要するにそれは一有機体の機能停止の退屈なヴァリエーションに過ぎず、その死の瞬間やら死に到る決意に真理が介入してそれを煌めかせるなどといった幻視を信ずるほど大岡氏はロマン主義者ではなかった。特攻の飛行士たちが真理への挺身において燃え立ち死んで行ったなどとはおそらくほとんど信じていなかったでしょう。人間は状況の動物であって状況が要求すれば信じ難いことでもする動物です。ですから、特攻の兵士たち、或いは彼らに一種の極限を示すレイテ戦の兵士たちは要するに愚劣な社会と国家が作り出してしまった状況の中で、戦闘もすれば強姦もすれば略奪もし虐殺・惨殺もしたのであり、それ以上でも以下でもなかったのも、そこに「人間を巻き込む悪徳と矛盾」（『レイテ戦記』）が瀰漫していたことを氏は隠しません。敗軍は天使群どころか充分愚劣だったのです。ですから、彼ら敗軍の兵士たちの絶望的な死に、或る真理への勇気を認めようとするのは大岡氏の偏執であって、氏はそれも隠しません。それは中原中也の異常な性格と人生が、要するに偏屈で非社会的な、異常に脳の動く愚かしい子供のそれでしかないと思いつつ、それを詩的空間に生きた詩人そのものとして偏執しようとしたのと同じといってもいいでしょう（繰り返しますが、大岡氏は中原が類い稀な詩を書いた

詩人だからその人生を詩人のそれとして描こうとしたのではありませんでした)。特攻攻撃の兵士たちにしたところで、それ自体を特権的なものであったとは氏は書いていません。「戦闘の経過の中では、人はこの一線を案外すつと通り越す。被弾した航空機のパイロットにとって、自爆は避けられぬ死をいさぎよく飾ることであり、憤怒の感情を解放することである。壕内に飛び込んだ手榴弾を体でかばって、僚友の身代わりになるような道徳的行動が反射的に取られることがある」、それ以上でも以下でもない、と。現実の特攻兵たちは大方、「醜悪な基地の生活と特攻の美名の間に若い心を傷つけられた」若者たちに過ぎず、「基地を飛び立つと共に司令室めがけて突入の擬態を見せてから飛び去る特攻士があったという噂が語られる」等々……しかし、と氏は続けます「基地の兵舎で、特攻と決定してから出撃までの幾日かの間、あるいは飛び立ってから、目標に達するまでの何時間かの間は、人間に最も過酷な生を強いる、と私には思われる」、その恐ろしい苦悶の中に窮迫の純粹さ、真理への意志という「救い」が、真理の介入が、或いは真理への勇気がないとしたら、他に彼らの無益な死から何を残すことが出来るか……それが「近代小説家」の倫理において、つまりはありとあらゆる、この社会から外れ行き場のない者たちにその空間を付与するという倫理において、大岡氏は偏執を引き起こすのです。その偏執において、彼らを希望と化するのです。

……ともあれそのようなものとして小説『レイテ戦記』は書かれ、置かれるのです。

大岡氏にとって社会への不信は生得に近いものでしたが、時代も日々募る愚行で充分不信に値し、その大岡氏をもっとも信じないものによって戦場に送られ、敗走、或いは死の窮迫の潰走の中で、社会が完全崩壊した空間というものを経験します。社会から隔絶した、でもなく、社会から引き離されて、でもなくて、社会が死滅しようとする空間を経験する。その経験の中では大岡氏自身ほぼ確実な死への傾斜の中にあり生からの一種の隔離の中にあって、そこには当たり前といえれば当たり前死すべきものであることの剥き出しの自己確認が

あり、そこに孤独において死んで行く者とそれなしで、或いは端的に人間なしで自存する「自然」との一種ミスティックな融即を確認します。大岡氏はそうした類いの心理状態を神秘といったような回路で受け入れる性格ではないので、自己分析されますが、それは先にも引用しましたハイデガーの言葉を（再度不正確に変奏して）援用すれば、「生が存在の向こうへと弾け飛び、存在が生のこちら側へと弾け飛ぶ」かのような経験ではあったはずで、それを一種の「真理」の瞬間と言ってもいいのですが、ともあれ、そこで体験した「自然の変容」と言うしかないものは、氏の作家としての根源的な体験となります。『檜原』で氏が大鳥圭介の文の「愁色を帯びた山々」の記述に異様なこだわりを示したのはそれ故でしょう。或いは『武蔵野夫人』を筆頭とする氏の作品に特徴的な、自然への地理学的接近、或いは執着とも言うべきものもそこに発するでしょう。地理学や地図作成は大地や自然を人間の区画と分類の欲望、一種の「自然の社会化」の仕草ですが、同時にそれは、人間なしの自然が人間による切り刻みの最初の瞬間に示す、拒絶と受け入れが絡まるような一種官能的な変容の経験への執着でもあって、それは論理的だけれども抽象的観念的な思考を嫌う大岡氏にとって（主人公を「狂気」と設定しなければ「神」という語を許さない潔癖を氏は示す訳です）、観念を伴わない意味での「真理」との隣接の瞬間のようなものとなると思います。こうして臨死の敗走の空間は或る究極的な受動という形で氏に真理の空間を発見させることになるわけで、そこから氏の「敗走者たち」への執着は或る意味、「真理」空間への執着と同じものを意味することになると思います（ロマネスク系譜の作品においても、氏の主人公たちは例外なく敗走者として設定され多くの場合そこから帰還することはありません）。ところでそうした空間が氏にとっての「真理」空間を成すとして、その空間は常にすでに、社会への拒否を代償としてのみ得られるものとしてあります。この構図は至極平凡なものですが（真理に独創性がある必要はありません）、氏に於いてはそれは愚劣な社会に強いられた敗走の経験を代償と得られるという一種倒錯的な構図が刻まれる点にその特性があると言っていいでしょう。ここから『レイテ

戦記』に単なる追悼の戦記とは異質の肌触りが生ずるのではないかと、思われます。それは何よりも愚劣な国家社会の決定による自滅的な愚行で、その愚行によって膨大な血が流され無益な死、慰霊しようもない空疎な死を死ななければならぬ者に溢れた戦争でした。しかし一方でそれは、国家の自滅という異常な空間を開きながら、敗走者たちを、さらには死者たちを、或る「真理」の空間に開き導くことにもなったのではないかという、如何にも残酷で倒錯した眼差しです。あらかじめ定まった敗戦を戦うという異常な戦争を戦わされた者たちは、まさにそれ故に社会というもの、国家というものの陋劣さと本質的欺瞞性を認識し、さらにはその崩壊の彼方に開く「真理」性、ありとあらゆる社会の彼岸に開く「真理」の可能性を身をもって知るという皮肉な倒錯を経験することになる訳です。しかもその「真理性」は死を（あるいはほとんど死を）代償にしてしか得られないというかたちで経験することになる訳です。奇妙な倒錯によって、『レイテ戦記』は近代における「真理」の開けをその根本的な倒錯性において書き記した小説……或いは神秘を一切内包しないかたちで書かれたアポカリプス（つまりは究極的には一切の救済論を持ち得ない、残酷なアポカリプス）……「真理の書」とでも呼ぶべきものとなるのです。

*

近代社会は人間が自分自身の影をぴったり覆うようにして形成された体制です。そして仮に、社会の外、その崩壊の外にしか「真理」の空間は開かれなるとすれば、近代社会において「真理」は人間が人間から外れ、その外に出て行くということにおいてしか有り得ないこととなります。これは如何にも倒錯した構図になりますが、さして不思議な構図でもないので、と言うのも「人間」というのは社会的概念、ただひたすら概念にしか過ぎず、何処にも存在しないものです。じっさいに存在するのは個々の個体であって、ですから、人間が「人間」の外に出ることは単純といえば単純なことで、私たち個々の孤独はすでにいくばくか常にすでに「人間」の外に出ているということになります。私

たちは「人間の社会」という組織と概念にぴったりと覆われ言わば監禁されている訳ですが、しかし、孤独において常に少しばかりそこから脱出していることとなります……では、そこに発見する私たち自身とは何か、そこに「真理」があるとすれば何かと云えば、これもまた退屈といえれば退屈な、しかし他にない以上絶対的な真実、つまりは私たちは生と死の窮迫のはざまにあって、死んで行く、崩壊して行くという端的な事実です。つまりは私たちは、私たちもまた本質的に「敗軍の敗走者」であるしかない者として自身の「真理」を発見する訳です。さしあたりは神という観念なしの、キルケゴールにおける「救いとしての死にいたる病」ということでしょうか。ともあれ、大岡氏の或る意味倒錯した巨大な仕事は、私たちの真理のありかをそうしたかたちで指し示すのです。

これは如何にも絶望的な地獄巡りめいてきますが（繰り返しますが大岡氏には基本的に救済観念は存在しません）、なんの慰めもないという訳のものでもないでしょう。『武蔵野夫人』の勉が彷徨う地[・]図[・]と[・]自然[・]がない訳ではありませんし、そこでは不意に自然が「愁色を帯びて」ひろがり、それが救済の代わりを成すかも知れませんし、死にいたる時間を不思議な手仕事のように進める『花影』の葉子になにがしか言い難い救済のひろがり、その死にではなくて手仕事に見出すことも可能かもしれません。それが私たちの希望でなければならないのです。

*

……。以上を延々と書きながら、文末のたびに引用しそうになって思いとどまって来た言葉(?)があります。それはトマス・ピンチョンの主人公たちが度々言葉の端々に口にすることで、それを最後に置きます。

「ゲ、ゲ、ゲ！」。

……。さすがにこれではあまりなので、これまたピンチョンからのものとして冒頭に挙げたエピグラム、『重力の虹』の末尾です。

“Now everybody!”

周知のようにこれは歌うことへの誘いの MC (!) で、そこで歌われるのは、エピグラムの「歌詞」です。あえて訳すまでもない英文ですので、再度、お読み下さい……出来れば節をつけて。

*大岡昇平作品からの引用は中央公論社版『大岡昇平全集』（1973年～）による。